

なゝもと櫻

泉鏡花作

—

小石川に恐しい雷が鳴つた晩だ。安藤坂下から第六天のあたりまで、黒白も分かない眞の暗で、篠突くばかり降りしきる雨のなかに、町も屋根も静まり返つて、物の音も聞えない、中坂見附の軒の下に「いとしん」と書いた行燈が二に濡れてぼんやり見える。其平假名で「いとしん」と書いた眞赤な字が、吹き込む風で行燈の灯があふるに連れて、大きくなつたり、小さくなつたり、廣く且つ狭く動くやうで、恐く此時水道町の天に動いてるものは、電と此灯と、それから行燈の前に踞つてる車夫の身體ばかりであらう。

今しがた此處で草鞋を買つたんだが、品物を渡して金子を受取ると、荒物屋のかみさんといふのが、いや、不愛想千萬な、「酷く吹込みますから御免なさいよ。」とばかりで、洋燈を袖で庇つて後退

りに引込んでしまつたので、車夫はたゞ一人軒下に
つくばつて、雫の落込まないやうに、提灯に手拭を
かけて、結へて置いて、其草鞋を穿かへて居
た・・・・・だんまりで、手疾く緒を結んで居る横
合から、

「車夫さん、ちよいと！」

と呼んだのは婀娜な聲。降が強くつて聞えないの
で、

「ちよいと、車夫さん、ちよいと、」

とまた聲を掛ける。

「え、」

と氣が着いて、暗闇の中をすかした、身體を捻ぢ
て顔を上げると、合羽からばら／＼と雫が垂れた。
ちやうど白銀の蓑が揺いだやう。筒袖をばさ／＼さ
しながら、

「私わたしですか。」

「あゝ、お前まへさん。」

といつて、ザラ／＼と雨あめの脚あしを振ふり亂みだしてズツと出でる。ちやうど此この時とき、坂上さかうへの森もりの方ほうから大幅おほはな電いなびかりをまつしぐらに浴あびせたから、抜ぬけるほど色いろの白しろい、眼め鼻はな立ただちのきりツとした、凄すこいほどいゝ婦人をんなが、紺飛こんがす白りの單衣ひとへに黒くろ繻子じゆすの帯おびをしめて、紺蛇こんじゃの目めの傘からかさをさした、びしよ濡ぬれの立姿たちすがたの、顔かほから胸むね、眞黒まっくろな衣服きもまで、蒼あをくなつてちらりと見みえた。瞬またく間まに暗くらくなると、また婀娜あだたる聲こゑで、

「ちよいと、築土前つくどまへまで行いかないか。」

車夫しやふは片一方かたいつほうの足あしへ、別べつの新あたらしい草鞋わらぢをあてがつて、

「えゝ、御免蒙ごめんかうむりませう。」

「おや！ 行いつちやあくれませんか。」

「へい、旦那がありますんで。」

「さう！」 といった切黙りになる。

どう／＼といふ雨の音だ。

「困るね、もう歩行くこたあ嫌になつたんだもの、
ねえ、車夫さん、何うかして下さいな。」

變つたことをいふ、車夫はツツケンドンに、

「旦那があるんです。」

「いゝぢやあないかね。」

とすねたやうにさういつた。大方淋しくはあり、
恐くはあるから、何の道分つてるのにわざと搦むん
で、要するにこの暗夜寂寞の境に於て、少刻の間で
も人間とつきあつて居たいので、それでそんなこと
をいふのであらうか。

「だつて困るもの、こんなしどいのに、もう歩行
けやしないぢやないか、ね、若衆さん、考へてごら
んなさい。お前さんも商賣冥利だ、女を一人世話
して下さいな。」

車夫はものもいはない。婦人は頓着をしない風で、

「知己の車夫でも居ませんか、後生だから世話し
ておくれよ。え、頼むつてば、お前さんは邪慳だ

よ。」
「私あ土地のもんぢやあないんです。」
と冷かにいひ放つて、提灯を手にして立つた。

「ほゝゝ。」

意外いぐわいに急きふに笑わらはれたものだから、車夫しやふは呆あきれて、
猶豫ためらつてる。婦をんなは梶棒かぢぼうへびつたり身からだ體たを寄よせて、

「御免ごめんなさいよ。」

といふかと思おもふと、突然いきなり幌ほろの中なかを覗のぞかうとする。
車夫しやふは驚おどろいて、少すこしむつとした氣味きみ合あひで、

「何なにをするんだ。」

「可いいんですよ、ねえ、旦那だんな。」

と澄すましたもので、ばたりと傘からかさを背せなかへ懸かけて、
髪かみの濡ぬれるのも構かまはないで、無暗むやみにすかして覗のぞいた
が、

「あら、まあ、婦人をんなだよ。道理だうりで、」

と莞爾にっこりした。

「男だと下りてくれる處だけれど、仕様のないことね。」

婦人は呟いて、身を開く。車夫は直に梶棒を上げようとす。遮つて、

「ぢやあね、車夫さん、かうしておくねな。逆もこんな降ぢや私歩行やしないんだから、お前さんがお客を送つて、歸つて来るまで、こゝの軒下で待つてようぢやあないか。歸りに乗せてつておくんなさい、可いでせう。」

車夫は素氣なく、

「いろんなこといつて、姉さん、不可ません。」

「あら、それが不可ツて、お前さん薄情だわ。此様に頼むものを、そりや疲れておいでぢや有らうけれど、肯いてくれたつて可いぢやありませんか。ねえ！」

「何卒御免蒙りたいもんで。」と判然いつた。

婦人は少し聲の調子をかへて、

「何故さ、え、何故だよ。」

「だつて、此雨の降るなかに、私が歸つて來るまで、立つて、待つてようといふのでせう。」

「はあ、左様よ。」

「ですがね、」

車夫は沈んだ聲で、

「近い處がこのお嬢様です。」

幌の中で、幽に吐息をつく氣勢がする。響き渡るやうな雨の音で。

「私あね、お得意先から、しつかり頼まれて來たんですがね。え、一體ようこそ確にお引受申して

お送り申しますてえのは、困つたけれどね、斷つて私をとおつしやるもんだから、ま、おともをして來たんでさ。一生懸命でやつて來たんですが、通りすがりの客を乗つけてるとは違つて、ちよいと躓きでもしようもんならと氣が張つてならねえんで、モおど／＼して居たんですがね。とう／＼お前さん中の橋手前で、左の足へ釘を踏づけたんで、草鞋や切れてるし、今それで穿きかへたんですが、こんな風ぢや、これから先何んなことがあるかも知れねえんで、しつかり請合つちやあ參られませんか。だからお前さんに當にして待つてられちやあ、」

「皮肉なことをいひツこなしさ。」とわけもな
く言ひ消さうとしたが、車夫は極めて眞面目で、

「いえ、皮肉なこたアありません、私やつくノ、
さう思ツてるんで。眞個でさ、人間てえ奴あ後刻
の知れねえもんです、待つて在らつしやい、きつと、
いふわけにや行きませせん。」

「馬鹿にむづかしいのね。」

「だから堪忍して下さい。姉さんなら姉さん、お前様が待つてると思つてると、滅法に其気骨が折れて、身體ア自由にならねえんで、平氣で駈けちやあ居られませんかから。」

「だつて、何處まで行くんだね。一體、」

「え、何、そりや大塚の取着までぞす。」

「此處から大塚まで行くのに、江戸三界ぢやアあるまいし、水杯にも及ばないぢやあないかね。」

「ま、いつて見りやそんなもんですが。」

「で、何うしたの。」

「さきの事は分りません。」

と投げるやうにいつて太い呼吸。婦人は黙つて、ぢつと考へてる。

此時、車の幌の中から、優しい聲が少し震へながら呼んだ。

「車夫さん。あの、」

車夫が提灯を持ちかへると、明がさして、高島田の少し前屈みになつて外を透かして居るのが見える。

「私は下りますよ。」

「えゝ何うなすツたんで、」と提灯をまた差あげる。

「下りますから可うござんすよ、私下りますから車夫さん、」と、はや身動きをする。車夫は困つた様で、

「何うなすツたんです、え、此處で下りなすつちやあ私が濟みません。」

「いゝえ、構ひませんの、足をお痛めだといふし。」

「何、それだつたつて、大塚までお送り申しますのに、わけやありやしませんから。」

「其上、あの誰方だか、お困りの様だから。」
「先刻からものもいはないで、ぢつと耳を澄して、そして頻に車の中を、うかゞつて居た婦人が、チヨイと頷いてまたズツと寄つた。」

「お嬢様、私でございますよ、清川さんのお嬢さん。」

清川さんの嬢さんと、續けさまに二度ばかり聲を懸けると、ひツそりした幌の中が氣色ばんで、

「おや、お金さんかい。」

「は、お嬢さん。」

「知己なんですか。」

車夫は何か氣合ぬけがしたらしい、妙な場合である。

「何方へ。」

「お嬢さん、あなたは？」

といったが急に氣が着いたやうに、

「さ、何卒、お急ぎなすつて、何うも飛んだお邪魔を致しました。いゝえね、あなた、一寸何だつたもんですから、ツイ其、アノ若衆さん。」

「えゝ。」

「氣をつけて行つて下さい、それぢやあお嬢様。」

車夫は梶をあげた。雨は一しきりまた急になつて、轟々といふ凄い降。

「ちよいと下りるよ、アノ、私は下りるからね。」

「飛んだことを、何ういたしまして、飛んでもな

い。
」

「でも、あの、私は何だから、」と少し思はくがある様子。此方は些も氣に懸けないで、

「そんなにおつしやいますのなら、チヨイとかうして、頂きませうか、アノ若衆さん。」

婦人は向き直つて、キツと車夫を見た。

「行歸 お前さんも御苦勞ですが。」

「えゝ。」

「急いでお嬢様をお送り申してね。そして都合が可かつたら兎も角此處まで来ておくれな。私、心待に小一時間待つてませうから、可ござんすか、さうして下さいな。其上は乗せておくんなさるとも、そりや何うともさ、ね、兎も角もだよ。お嬢様も如彼に仰シヤツて下さるもんだから。」

上から 慌しく口を入れて、

「あれ、さうぢやあないんだけれど、ね、私は此

處で、」

「滅相な。」

「いえ、さうぢやあないんだけど、」

「可うございますよ。如彼ことおつしやるわ、ねえ、分つたの、若衆さん。」

「ぢやあ可うごす。一時間ばかりですぜ。それが過ぎたらさつさとお歸んなさいよ。」

「あゝ、可いとも。目白の鐘も聞えるだらうか
ら。」

「ぢやあ、」

「氣をつけてね、」

「あれさ、」

とお嬢様が身悶えする時、がら／＼と曳き出した。

暗やみの中なかに提灯かんばんの明あかりがぼんやり。車くるまは宙ちゆうをまはる様やうだ。立たつてた婦人をんなはツカノと追懸おつかけて、貫つらぬくやうに冴さえた調子てうしで、

「車夫くるまやさん！」

「え！」

と思おもはず立たちどまる。腕車くるまがぐらノと揺ゆいでとまつた。

「忘れわすちやあ否いやよ、」

といふが疾はやいか、持もつてた蛇じやの目めの傘かさを突いき然なり大道中だいだうなかへ抛はり出だして、

「待まつてますよ。」

車夫しやふはじろりと見みて、

「狂気きちげえ。」とばかり颯さと駈かける。婦人をんなはゞたノと荒物屋あらものやの軒下のきしたへ走は込んだ。格子戸かうしどへ電いなびかりがキラリと當あたつて、濡髪ぬれがみを搔かいてる手てが白しろい。

四

「恐しい降でありますな。」

と片手を頬邊へあて、少し俯向いた、首筋の細長い、咽喉佛の突起した、胸の瘦せた、色の生白い、五分判の、面長で、鼻の隆い、眉間の狭い、眼の窪んだ、頤のこけた男で、鼠の豎縞の糊澤山でバリノゝした単衣に、白木綿の襯衣を襲ねて着て、小倉の帯を胸高に占めて居るのは、三乗といふ先生で、肺結核の患者である。

「通雨でございませう。」

と襟をちよつと搔合せて、満類屋と書いた配物の團扇を下に置いたのは、清川の女主人、道子といふ、奥様で、母様で、未亡人で、品格の可い夫人である。鼻筋の通つた、眼の清しい、口許の可愛い、爪核顔の、眉は剃つてるがちつともあとの無い、小さく結つた鬘に艶のある、生際の揃つた、この母様の兒が、あのお嬢さんだから、歸途のほどを案じて居るので、先生も同感だ。

「まだそんなに晩くはないでございます。」

斯ういつてまた片手を頬邊にあてがった。先生が斯うやつて片手を頬邊へあてる時は、何時でも先刻のやうに少し俯向くので、また片手をずつと伸して、キチンとすわつた膝頭へおツつけるのか例になつて居る。脊高い人で、行儀正しく座を構へた其膝といふものが、大變瘦せて居て、それで着物が薄いので、目立つて細長い。そしてひつたりした、例へば畳の上へ風呂敷を疊んだやうなものだから、膝頭へ手を置かうとするのは蓋し容易なことではないが、方便なもので、先生撫肩で手が長い。で、恰も弓のやうにしなやかに垂れて十分に膝頭へ着けることが出来るので、其手がまた小さい團扇ほどある大きなものだ。

「あなた、お寒くはございませんか。」

と奥様は背後を見返りながら、さう聞いた。先生は瘦せツこけた頤が胸にくツつくばかりに俯向いて、あの大きな手の細い指で、丁寧に一ツづゝ襯

衣の釦鈕を二ツはづして、やつぱりうつむいたまゝ、
眉根を寄せて、覗くやうにして襟を擴げて、

「まだ下に一枚着とるであります。」

奥様はまた襟にちよいとあたつて見て、團扇を背
後へ押遣りながら、

「お寒氣がありませうね。」

先生は、ゆるりと釦紐をかけ／＼、

「血が映しましてな。」

と淋しさうな撫肩だ。其時大屋根から、軒から庭
前をおしつけるやうな雨で、森として籠洋燈の灯も
動かない。油團の暗い十疊敷に、薄いのと、濃い
と、男女の影法師が二ツある。

この先生は数学家で、二次方程式の解法を發明した人である。年齢は二十九で、巳の年紀で。

生は豊多摩郡の新井村。名は資吉、姓を岸田といふ、農家の一人兒で、寺子屋にも、小學校にもツイ通つたことのないのであつたが、同一村に同一年紀、其頃二十三の、探了といふ、坊さんがあつて、これが唯た一人のなかの可い朋友であつた處、其新發意探了が一朝、志を立て、哲學を研究しようと、いふ目的で、其には大學の文科へ行くのが望みで、高等學校へ入らうといふ下拵に、牛込の大久保で、何とかいふ私塾があつたのに通ひ出した。

これにさそはれて資吉も何といふ方向のあるでもなかつたが、一所に連立つて通つたのが、他日かういふ先生となるべき、飛んだことのはじめだつた。

二人ともいふ年紀で、一廉の分別男で、これが學問へ數珠を切つたのだから、其道心の堅固なことは

いふまでもないこつて、あはれな工女こうぢよが起おこされる製せい造場ざうばの汽笛きてきの聲こゑを不ふ斷だん連つれ立たつて行く村むらはづれの橋はしの上うへで聞きいたもので。腰こし辨べん當たうでセツセと通かよつたが、新しん發はつ意ち探たん了りやうの方は英えい語ごが得とく意いで進しん歩ぽが早はやく、先せん生せいの方ほうは數すう學がくに凝こつて分ぶん解かいが疾はやかつた。二ふた人たりともだんまり坊ぼうのむつゝり家やで、人ひとずきの悪わるい性た質ちだつたが、同おな一じだんまり坊ぼうのむつゝり家やといふ中なかでも、うまれつきは上うへと下したで、譬たとへて見みれば笑わらふ時ときだ、探たん了りやうは上うへを向むいて笑わらつたし、先せん生せいは下したを向むいて笑わらつた。學がく問もんの仕しかた方も違ちがひ、習ならふ方ほうと考かんへる方ほうで、一ひとり人は口くちを利きくし、一ひとり人は黙だまつてた。こゝに、一ひとに二ふたを和くわすの三さんといふことがある。おんなじわけで、二ふたに二ふた和くわすの四よといふこともある。ひどく立た入ちいつたお話はなしですが、同どう數すう異い號ごうの和くわは零ぜろなりといふ原げん理りもある。

さうすると、探たん了りやうの方ほうは直すくに習ならつて立たち處どころに覺おぼえてしまふが、先せん生せいの方ほうは蓋けだしそんなではなかつた。この、一ひとに二ふたを和くわすの三さんといふことさへ、自じ分ぶんでわか
るまでは、習ならはないで、何いつ時つまでも考かんへ／＼して、
分わかると、ポポンと手てを拍うつて喜よろこんだので、つまり一ひとを
聞きいて十じゅうを知るしるの才さいだ。

けれども一を聞いて其十を知るまでには、一月かゝつたことやら、二月かゝつたことやら、乃到半年かゝつたことやら、詮ずる處、探了が高等學校を卒業して大學の哲學科へ入り得た時まで、先生は二次方程式の解法を發明し得たのである。

と一口にいつてしまへばわけのないことだけれど、此間に先生が父親に死なれたこともある。澤山あつた財産をいま傳通院のあたりに古着屋をして居る叔父の熊藏にすっかり奪られたこともある。また容色のいゝ母様が、良人の弟、すなはち先生の叔父の熊藏に内證で世話をされるやうになつたこともある。それから餘り刻苦して代數を學んだ結果、祖父さんの代からも譲られない、肺病に罹つた大事件もある。

ツイ一昨年あたりまで、傳通院裏の一私立學校へ數學の教師に雇はれて居た事もある。で、其頃は、地面を賣つた、母屋を拂つた、父親の隱居所であつた處に、一人住居をして、熊藏の家の前を素通りにしちやあ、毎朝、新井村から學校へ出勤したこともある。それから、お藥師様の獻燈に、はじめて時鳥

の句くを讀よんで、點料てんれう二百で、獨步どっほ生せいといふ名なで、選せんに入いつたこともある。

其獨歩生と號したわけは、先生、始終數理を考へつゝ居るのと、日増に身體が悪くなつて呼吸苦しいのと、其とで、教場から、體操場まで行く間でも、他の生徒や、教師連と一所には歩行かれない。で、何時でも背後へさがる。他の者が待合はして居てあげれば、嬉しがつて追着くけれど、一所に歩行き出せばまた後れてしまふので、新井村から雜司ヶ谷、音羽を通つて、大塚から傳通院まで行くあひだ、帳場の車夫なり、花賣なり、納豆賣なり、ツヒぞ此先生が人と連立て歩行くのを見たことは近頃ない。先生自分でも、其は知つて居るから、其で恚う號したもので、獨歩生　ー　といふ心は、男兒世に處す獨立して獨行などいふ、驕つたわけではないのである。

それからまだある。おひ／＼病氣が重つて、沈んだ、太い聲の角のないやうな、ぼやけたやうな、切なさうな咳をしつきりなし咳入るやうになつてから、結核は不治の症で、恐しい傳染病だ、其危険な身體

で何百 人といふ生徒に臨むのは、全然かなりやの口を割つて毒を吹き込むやうなものだといつて、とかいふ、いはれたともいふ、半歳も経たないで辭職したこともある。

辭職してから食ふ道に困つて、うつくしい母親が世話になつてる、叔父の熊藏の古着屋の奥に厄介になつたこともある。

其厄介になつてる間に、と、う／＼枕に着いてしまつて、金筆筍に錠をおろした前の、六枚折の屏風の蔭に、狭いから一間を仕切られて寝て居たこともあつた。

此時、とても助かるまいと思つた叔父が、「遣言は聞いてやるから呻いてくれるな。」

といつたさうだ。

これを聞かされながら、先生は枕頭に紙製石盤と、石筆とを置いて、遂に彼の方程式の解法を此時

に到つて発見したので。

探了が文科大學へ入校したのとおんなじ頃だった。

さて、かくまでにして発見した解法を、先生は何にしたかといふに、半紙の裏表へ鉛筆で細かく十枚といふものをかきつけて、そして少年世界といふ雑誌へ投書して、いまに！ といつて居たが、没書になつた。何もこんな事は先生を煩はすまではなく、實際何とかいふ原書には明らかに其解式が出て居るさうだ。但其原數學者は、先生と同じ刻苦勉勵で以て漸く発見したんださうだけれど。けれども、先生は死なゝかつた。

秋の末になると、床を離れて起きて出て、紙製石盤を懐にしながら、傳通院の中だの、戸崎町の原だのをぶら／＼散歩してあるくやうになつた。木餘薬師の境内に、小石川七不思議の一ツとしてある、逆銀杏といふのがある。

其下で、五ツばかりの愛くるしい男の兒が銀杏の

實を拾つて居るのを、堂の縁にしよんぼりと腰をか
けて、現在の通り、其時も片手を頬邊へあてゝ、ア
ノ膝頭へ手をかけて、長くなつて、ぢつと見て居た。
黄昏時で、耳朶の白い兒が、見えたり、隠れたり、
銀杏の樹の根をちよる／＼とまはつて歩いて、拾ひ
あつめたのを掌へ乗せて、一ツづゝ數へたが、二ツ
三ツ、二ツ三ツ、とあどけなく勘定して、四ツが何
してもいへなかつたので、大息をつきながら先生が
そろ／＼あるき出して、アノ大きな掌で、すつぽり
蓋を被せたやうにした。兒の頭を撫でながら、

「四個！」としつかりした聲で教へて、樂しさ
うに笑つたが、風が身に染みたのか、ごほりと咳入
つて、鼻で呼吸をして、切なさうに肩を揺つた。さ
らぬだに薄暗い處で、漆のやうな髪が伸びて、瘦こ
けた頤に鬚は苔を生やしたやうで、蒼い顔をし
て居たんだもの。

小兒は擲られるやうな顔をして、しばらく先生の顔を視めて居たが、忘れたやうに掌の銀杏を落して、わつといつて泣き出した。先生は驚いてすかしながら、懐から暖氣のついた石盤を出して持たして、やう／＼泣きやまして、遁げて行くのを茫乎見送つたことがあるが、其きり與つてしまつて、石盤は持たなくなつた。

この石盤は、其以前新井村の探了に誘はれて、大久保の塾に通つた時買つてから、父親に死なれて、財産を取られた前後、未だ學校へ教授に雇はれない前に、一度叔父の世話で、おなじ古着屋の店を持たしてもらつた、其時これも叔父の周旋で、女房を娶つたが、美しい女で、何故か、近所ぢやあ後指をさして憎まぬものはなかつたけれど、先生は一度も苦い顔一番した事はなかつた。が、最初の最後で、いまゝで怒つたといふのを人に知られて居なかつた人だつたに、何の時か、恰も石盤を手にして居た、其石盤で以て女房の大丸鬘を打くじいて斑の入つた筭

の目立つた長いやつを三ツに折つたことがある。其
ツ切、女房も店も叔父の手へ疊まれてしまつてから、
それから學校で、辭職で、肺病で、遺言で、解法の
發見で、十八枚で、細字で、投書の没で、散歩で、
小兒で、銀杏である。

それから、其時で、それまでに、凡四年間持ち
傳へたのを與つてしまつて茫乎した。石盤を貰つた
兒は――先生は知らなかつたが、あのあたりは
今でも正月出る鳥追の巢窟で――其の兒で
あつたんだ。

それから冬となり、春を過ぎた。夏になつてまだ
先生の死なゝいのは、其は大方壽命がまだ盡きない
のであらう。

竹早町から同心町を通じて本郷へ出る道は頗る狭
い。豆腐屋と下駄の齒入屋とが向ひあひ、料理屋と
交番が睨らみ合つてる安髪結がお客を並べて、直店
端で、しゃべつて居ようといふ處だから、兩側から
じろ／＼見られるのを恥かしがつて、裏の士町

の木の^き下^{した}、竹^{たけ}の中^{なか}を通^{とほ}つて、杉垣^{すぎがき}づたひに、いつでも先生^{せんせい}が散歩^{さんぽ}する、原^{はら}の上^{うへ}の墓原^{はかばら}の横手^{よこて}を通^{とほ}つて、傳通院^{でんつうあんら}裏^{うら}の學校^{がっこう}へ通^{かよ}ふ、名高^{なだか}い美人^{じゅん}が二人^{ふたり}ある。

誰^{だれ}でも振返^{ふりかへ}つて見^みないものはないといふのが、醫師^{いし}の令嬢^{れいぢやう}で、みどりといふ、これは許婚^{いひなづけ}のある女^{をんな}で、いま一人^{いちにん}、人^{ひと}が見送^{みおく}らないものはないといふ評判^{ひやうばん}なのが、清川^{きよかは}の娘^{むすめ}で、清子^{きよこ}といふ。

二人^{ふたり}とも十八^{じふはち}で、二人^{ふたり}とも高島田^{たかしまた}で、二人^{ふたり}とも學校^{がく}へ通^{かよ}つて居^ゐたが、一體^{いつたい}江戸兒^{えどっこ}は氣^きが強^{つよ}いけれど、まだ間違^{まちがひ}だといつて、思^{おも}ひ切^きつて女湯^{をんなゆ}へ飛^とび込んで、裸體^{はだか}で搔^{かきまは}廻^{まわ}したほどのものはないが、こゝになにがしといふ大學^{だいがく}林^{りん}の法師^{ほふし}あつて、酒^{さけ}にや酔^よつて居^ゐたさうだ。法衣^{ころも}で玄關^{げんくわん}から飛^とび込んで學校^{がっこう}の二階^{にかい}を追^{おひ}まはした事^{こと}がある。其頃^{そのころ}からこの清子^{きよこ}の方は退^ひいてしまつた。ちやうど先生^{せんせい}と前後^{ぜんご}して。先生^{せんせい}は蓋^{けだ}し清子^{きよこ}の舊^{もと}の先生^{せんせい}株^{かぶ}で、いまかく清川^{きよかは}の家^{いへ}に來^きて居^ゐるのも、つまりは先生^{せんせい}といふ關係^{くわんけい}からである。けれども學校^{がっこう}を退^ひいたからつて、内稽古^{うちげいこ}に先生^{せんせい}を頼^{たの}んで居^ゐるので、何^{なん}でもない。清川^{きよかは}の家^{いへ}は女^{をんな}主人^{あるじ}で、令嬢^{れいぢやう}と下女^{げぢよ}

と三人ばかり。家は小造だが庭が廣くツて、金子が
あつて、美人が居るから、不用心極まるが、其代前
に車夫の帳場があつて、平生心着がしてあるので、
驚破といふ時は八九人ばら／＼と馳せ參ずることに
なつてるから、こんな雨の降る凄^{すこ}い晩^{ばん}は、宿直^{とのみ}のた
めに勇士^{ゆうし}を、といふので、先生^{せんせい}を召^めすやうな工合^{くあひ}に
なつて居^ゐるのでは勿論^{もちろん}ない。

去ぬる頃、學校の教師なかまで懇親會をした時に、この先生には空前絶後であらうと思はれる、洒落？をいつたことがあつた。皆に何ぞと強ひつけられて、太く迷惑をした様子であつたが、其では滑稽演説を一番といふ前置で、

「えゝ、皆様、恵比須と大黒とで辨天様を引張り合つたら、孰らが勝つてございませうか。」といふ發言で、皆をアツと呆れさせた、其ツ切。式の如きむつゝり家のだんまり坊だから、清川の家では先生を談話對手といふのぢやあない、相談相手といふのも決してない。

たゞ清川の庭が廣い、築山、泉水、石燈籠といふのではないが、投やりにしてある廣い庭の、園生といふで、草樹が一面で花が咲く。殊に數十本の櫻の樹が植つてゝ、花の咲く頃は此の庭だけで霞が出来る。

そのはなさかり ことし はる なかば
其花盛の今年の春の半であつた。

先生は暮前からぶら／＼と叔父の家を出て、墓原に花が咲いて居ない處だの、寺内に花片が敷いたやうになつて散つてる處だの、騎兵が酔拂になつてる處だの、麥畑に、風が吹いたり、藪の奥に、牛が居たりする處なんぞを見ながら、裏道を通つて、大塚へ出て、平時の癖で下ツ腹へ兩手を置いて、頤を襟にくツつけて、俯向いて、徐々清川の前を通ると、清子が派手な装をして、戸外に出てゐんで、詠め見渡すといふ姿で居た。清子は先生を見て無言で挨拶をしたので、先生も會釋をしたが、一體歩行には幾度となく立停まつちやあ、其都度顔をあげて太い呼吸を吐かなければならぬやうに衰へてるので、恰も道を行くのは泳ぐやうな恰好ですが、ちやうど其時垣根の處で腰をのばして、つと満開の花の園生を見て、「お宅のでありますか。」とさも思入つたといふ風で視めたので、清子は、「あの、先生、ちとお休みなさいませんか。」と何の氣も着かないでさういつた。何うしたものが先生は辭さないで、のツそりと入つて框に立つたので、驚いて見

て居た清子は、内へ駈けて入つて母親に旨を通じて、
あらためて出迎へて、奥へ請じた。けれど、此方へ
といへば其方へ、彼處へといへば彼處、お敷きなさ
いましていへば敷くのだし、お食り遊ばせといへば
食いゝへるので、一向取ツ着き端が無くツて、母女
と客が大にてれて、ひどく白けて持扱つた時だつた。

母親が、

「先生、あなたは大層お顔の色がお悪いやうです
が、御病氣ではございませんか。お見受け申します
と、何かぶら／＼病で在らつしやるやうですが、肺
病なぞお煩ひ遊ばしちやあ、取返しが着かないさう
でございます。」と女気の優しさで、さう言つた
事がある。

先生は眼を眠つて、呼吸をついたが、

「私は其肺の結核性でありまして。」

と情なさうにいつたので、氣の弱い母親はハツと

思つたが、年紀のはたらきで、

「いえ、なあに、二十五過ぎてからは五十まで持つつていひますから。」

こんなあてのない事をいつてやう／＼其場をまじくなつたが、それからといふものは、先生の一擧一動、歩行つ振を見ても、坐りざまを見ても、あゝ、これがと、胸を痛めるほど氣の毒になつたので、何うにかして慰めようと、其後一度故と下女を使にやつて、先生を招じて、御馳走をして、清子にも其意を得させて、歸省した甥を歓迎するやうに、深切にして、優しくいつて、嬉しがらせて、頼もしく思はせて、懐しく思はせて、心安く思はせて、とう／＼こんなことにしてしまつた。

時々心學の片ツ端見たやうなことをいつたり、舊
 彼の探了が朋友であつたゞけに、佛しみた、因果の
 應報のといつた様なことを談したりすることもある
 が、それも二言めには深い呼吸をつくのだから、長
 くは續いて説つても居ないで、問はるれば問はれた
 やう、聞かれるれば聞かれたやうに、えゝとか、むゝ
 とか答へるばかり。それが三日とはおかないで、此
 頃ぢやあもう毎日のやうに入つて來る。甚だしい時
 は朝から來て、押通し晩まで居る。十時過ぎまで長
 座をする。

若い人は居るけれど、狛も居なければ小猫も居ら
 ない。金魚も飼つちやあないのだから、手を拍いて
 鉢をやつて其を見て居るわけでもなし、地體が弱り
 切つた身體だから、手もなりたけ動かすまい、足も
 出來るだけ休めて置けで、庭を歩いて見ようでなし。

いつも母親と、それから清子と、はなれ／＼の
 三かなへで、横を向いたり、俯向いたり、ものを言

つたり、黙だまつたりで、皆みんなが病人びやうじんにならないばかり。
はじめの内うちはおさんどんが、眼顔めがほで、「うるさい、
また来たか。」を見みせるのを、母親ははのおやがたしなめて
ただけれど、いまぢやあそれも言いはなくなつた。
で、いつものそりと入はいつて来きちやあ、「また上あがり
ました。」

此方こつちで「はあ」と泣なきたいやうだ。資吉すけきちもし
んみりして、「奥様おくさま、お邪魔じやまでありませうとは思おも
ふですが、内うちに居ゐちやあツイ淋さみしうてなりませんで、
何どうぞお構かまひなさらんやうに、もう此方こちらで、「と
いつて座ざにつくとハヤ太ふとい呼吸いき。

裁縫しこつとで忙いそがしくでもある時ときには――打解うちとけて居ゐ
るんぢやあないけれど、毎日まいにちのことだから、其處そこは
遠慮えんりよがなくなつてるので、「それでは失禮しつれいです
が。」とそれで濟すむ。黙だまつて雙方さうはう半日はんいち経たてる事ことが
ある。

あまり手持てもち不沙汰ぶさたなのが氣きの毒どくで、清子きよこは氣きの優やさ
しい女むすめだから、ちつとこれでもといつちやあ、雜誌ざっし

でも廣げて渡すと、まんじりして眼も放さず、
掌へ乗せて讀んで居ることもあつた。

で、ちつとも遠慮はしないにしても、何ていつた
つて先生は客だもの。たとひ内證でおさつは食べな
いにしても、俳優の風説はしないにしても、横ずわ
りはしないにしても、下ばかりで居ないにしても、
母女で晝寢はしないにしても、他人の、しかも壯年
の、男兒が一人、眼のさきに居て見れば、安心した
女湯のやうなわけにはゆかない。人目がないと氣を
ゆるした内端ばかりの様にむゆかず、水入らずで、
相愛する母子ばかりがさしむかひで居るやうな、そ
んなわけには、無論ゆかない。

極端にいへば、何の事はなく、清川の家には、極
めて權利のない、構ひつけないで置く、他人膚の、
水くさい、意氣地なしの、半間な、大人しい、そし
て氣の置けた、養子が出来たと同一様だ。

だから母親がいひ悪いのを無理に押堪へて、思切
つてかう言つたことがある。

「まことにかう申しちやあ何だかあなたを、とや
かう思ひますやうでもございますし、其上に何ぞや、
あの清が人様の目に立つ容色でゞもあつて。何の其
こそ振向いて見て下さるお氣もございませんことは
知れて居りますことですので、推つけがましい、失
禮な、いつて見れば、あなたをお安くしましたやう
な、申分でございますが、アレも一人娘で、縁前で
もございますのに、先生のやうな方と、そりや願つ
ても何ですけれど、まあ、いったやうなめので、ッ
イ世間の口と申しますものは、わけもわからないで
何かいひたがるものですから。」
「分り切つた事なのに、其時、先生のいひぐさが、
「何、何とでもいはして置くです。」と平氣な
もので。」

母親は恐れ入つて、

「いえ、其でも、」となほ推返しては見たんだけれど、「宜しいです、そんなことは構はぬが可いのであります。」こと爰に及んでは手もつけれない。まさか小兒でもないものを、叔父の許へ、お宅の資さんは毎日のやうにおいでなすつて困りますと、いつゝけて、叱らせる數でもないから、其まゝ泣寝入でつきあつて居る。あゝ、嫌だ、うるさい、と思ふ念が崇じては、僻といふことを知らない人にも、邪険な氣のない人にも、冷かな性質がなくつても、向つて居ると、むら／＼として鹽でも打かけてやりたい氣がする。けれども、例の淋しい姿で、しよんぼり歸つて行く影を見ると、いつでも左様だ、母親が鹽花を撒きさうにする下女を叱つて、

「ねえ、清、困るぢやあないか、私あツイ小兒の内から、この頃のやうな、嫌な思をした覺もなし、まあ、こんな思をしようとも思はなかつた。かういふと何だか算盤でも持つやうだけれど、不自由はせ

ずさ、戸外へ出たつて、人のお嬢様の扮装を見て、
僻むやうな氣も出ないで濟む。家は綺麗なり、庭は
廣し、のび／＼と住んで樂々と暮して居ながら、小
姑が二人あつて、姑が聾で、舅が酒亂で、そし
てお前、末の兒が麻疹で寝て居る、向のお長屋の女
房が羨ましい位な、思をするのは、何の因果だらう
と、さう思つて口惜くツてならないがね、よく／＼
考へて見れば、先生も眞個に氣の毒な、情ない、あ
はれなお方ぢやあないか。

聞けば立派な財産があつたのを、叔父さんにすつ
かり取られてしまつて、其處に厄介になつてる上に、
あの様子ぢやあ随分酷くあしらはれて居るやうだし、
母様といふのは心得違をして居るやうなり。お前あ
の容體ぢやあ、とても長いことはないのなもの、ど
んなに世の中が情けなくつて居るのだらう。

あまりうるさいから、何だけれど、此方で嫌な顔
をしたのが見えたな、と思ふ時だの、ちつとツンケ
ンしすぎしたなと、自分にも氣がつく時だの、そん
な時いつになく、早く歸らうとすりや、また氣に懸

つて、まだ可いぢやあゝりませんかツて、眞個の事だ、お世辭氣なしに留めたくもないし、ねえ、清。」

「さうですねえ、母様。」 とこれで母娘がしめやかになるのである。

「えゝ！そりや、おいとしいにやあおいとしいものでございます。」 とまんざら掃き出すでもなかつた女中が、名は初といつて、それこそ敵討でもしさうな體格、立派な髻をした忠義者で、ツイ近い頃座敷へ灯もつて出ると、袖あがきで、灯が消えて、アレと眞暗にした事があつた。

爾時あわてゝまた灯さうとしたのに、先生が居合せて、

「はゝ、灯はともさんでも可いでありませう。女中さん、お前の尻から後光がさすで、あかるいからお竹大明神だ、あはゝゝ、」 と暗がりの中で笑つたもんだから、初は恐しく憤て、それからといふものは、いかに奥様や、お嬢様が、先生を慰む場合で

も、

「あの資的すけてきは、アリヤ色いろきちがひ狂氣きやうきになりますよ。いえ、屹きつとでございます。私わたしはちやんと知しつて居をります。資的すけてきめ、人ひとを、アリヤ、滅相めつさうもない、アリヤお宅たくの、いゝえ、お内うちのお嬢様ぢやうさまに、いゝえ、氣きがあるのでございませす。疾はやく何どうか遊あそばしませんと、いゝえ、ほんとうでございます。」

母親ははは承知しやうちだけれど初はつの前まへだから、

「つまらないことをおいひでない。串戲じやうだんにも、そんなことがあるものか。」と《、一撃いちげきの下もとに卻しりぞけて置いて、清子きよこには人知ひとしれず、

「清きよや、氣きをつけないと悪わるいよ。」

「嫌いやですよ、母様おつかさん、串戲じやうだんいつて。」

「これは母様おつかさんの前まへだから。」

「今ですから申すんですが、アノ資的はありや顔色に露れて居りますわ。其が何ださうでございます。あの病氣と申しますものが、恐しく食意地の張つたもので、もういけなくなる前までもペロツと何かを嘗めますとさ。其から色氣が、これが奥様、あの病氣が重くなりまして、重くなりましてほど、しつツこくなるさうでございます。因果ぢやありませんか。」

と今日も暮れかゝるのに、灯も點けないで、初が蔭口を利用して居た。薄暗い玄関の中に、静な聲音がするので、振返ると、脊の高い、肩のしよぼけた、影のやうなのが、すツと來たから、冷りとして、面くらつて、いかに蔑視してる人物でも、好くない風説をして居たのを、直に聞かれたと思つては、氣の毒なやうな、申譯のないやうな、思ひで取殺されるやうな氣がするので、座敷を片付けると急いで女中部屋へ引込んだ、が、氣が滅入ること夥しいのに、どしや降となつたから、ます／＼しよげて、空恐し

く思つてる。さうでない、此の女酷くはしやいで、ガミノ、叱言をいつたり、叱つたりするのだけれど。

油團の上の二個の影はベツたり墨をこぼしたやうに、しばらく動かないでちつとして居たつけが、若木の枝を曲げたやうに沈み切つて俯向いてた、先生は、やつとのもので、膝に置いた手をのばして、座右にあつた茶碗を取上げて、縁を取つて胸まであげると、絲底が濡れて居たものらしい、櫻の木地を拭込んだ梅の花形の茶臺が一所にくつついたまゝで上つたので、何かいはうとした口をつぐんで、ちつと其を凝視めて居たが、ぽとりと二いだやうに油團へ落ちた。

母親は直に心着いて、一膝出て、

「さめましたでせう。」

「可うございます。」

と落着いて静にいつて、先生は絲底へ手をかけて、

両手で口へあてがつて、一口がぶりと飲んだのを、
其まゝまたぢつと見て俯向いた。これは手持不沙汰
だから欲くもない茶を場つなぎに唯吸つてるので。
いつでも一杯の茶をいつまでもお大事なものゝやう
に持つて居て、冷たくなつたのばかり嘗めてるので、
勢よく引かけようとした事はつひぞない。

いき

「おや！ 光りますよ、光りますが、」

と奥様は膝をずらした。此時、縁の戸の合せ目が
青くなつて、庭の土が眞黒になつて横幅廣く見えた
ので、

「えゝ。」と灯のかゝげに先生は灰色の顔をあげた。

「奥様、雷が五六百一所に鳴つて、鳴砕きでもしましたら、私のやうな身體でも、何うにかなりませうと思ひますけれど。」

「まあ、」といった顔へ、少し後毛がかゝつて

窺^{やつ}れて見^みえる。

また、電^{いなびかり}がした。先生^{せんせい}は茶碗^{ちやわん}を臺^{だい}にのせて、斜^{なぐめ}に下^{した}を見^みながら其^{その}縁^{ふち}を件^{くだん}の大き^{おほ}な手^てで手蓋^{ふた}をして、

「鳴^ならないやうであります。何^{なん}でありますか、そして何^{なん}ですか。」

奥^{おく}様^{さま}はお嫌^{きらひ}なんでしょうか。」

「誠^{まこと}に、もう、」

「其^{それ}は可^ようございますな、鳴^なりません。」

切^{せつ}なさ、うに肩^{かた}で呼^い吸^きをして、

「もうこんな病^{びやう}氣^きは治^{なほ}りませんな。しかし死^しぬとは思^{おも}ひません、早^{はや}く快^よくなりたいたいでございます

が。」

「え、もう眞^ま個^{たく}ですね。」

「はい、其^{それ}で、これは誰^{だれ}か町^{ちやう}内^{ない}の女^{をんな}が死^しにまし

てな。」

奥様は鐵瓶おくさま てつびんに觸さつて見みた。

「そして、其その新佛ほとけを火葬くわさうに、するのでござい
ます。」と、いきをきれ／＼にいひ出だした。

「其葬式が出来ます時です。私の此何でありますな。病人の髪を切つて、青竹の筒に入れて封じまして、一所に棺の中へ入れて送つて貰ふですな。さうして、其の焼きますと、治りますといひます。」とまた頬邊へ手をあてた。奥様は眼が覺めて、物にうなされるやうな心持で、きよと／＼して、返事も出来ない。

やゝあつて先生は、また茶を飲んだが、顔をあげると下頤にすく／＼生えた髯が、まばらに見えて、其が震へて居るらしかった。一呼吸ついて、

「何うでありませうか。」

「は、はい、多分でせうが、しかし忌はしい事でございますもの。」

「はい、さうも考へるでございます。しかし人間、何のめあてもなしにギウ／＼いつて生きて居りまし

ても語らんでございます。それかといつて、死んで
はなほ詰りません。私もいる／＼考へもございます。
随分いろんなことも思ひますけれど、到底この身體
ぢやあ、何を何うするといふことも出来んでござい
ます。奥様、

「はい。」

「さうぢやあないですか。」

「でも、此ごろは大分お色艶が可いやうでござい
ますよ。」

先生は重々しく頭を掉つて、

「其がいかなのであります。私も何でございます。
顔の色か蒼いのより少し紅をさした方が身體に可い
のだと思つたでございませぬ。けれども其が悪いで
あります。其といひますのが、今斯うして少し歩行
きますな。去年床に着いて苦しんで居ました最中に
は、其れは嬉しいほど顔の艶が可かつたでございま

す。今でも熱か出ます、一日なり二日なり寝てをり
ますと、其間は紅は紅くつて綺麗でありますから、
一體いかなのでございます。ほんとに困ります、奥
様。と力を入れる。

「ですがね。」

「いや、全く左様なんでございます。到底いけま
せんが、私は、かう思ふですな。何となく其自分の
他に同病人が出来て、其方が重くなれば、私が軽く
なつて、其方が死ねば私が活きますでせうと、いふ
やうな、ことも考へましたり。」

いつになくものをいふほど、奥様は懸念でならな
い。些少恐ろしいやうな思もする。

「いろ／＼考へて見ますけれど、何、うなります
事でございますか、一層無茶苦茶に人殺しでも、」

といひかけた顔の色がをかしかった。――やう
に思つたので。――火鉢にぴつたりノ寄つて、

「初や。」

「奥様、」

「初や、あれ。」

「何でございますか。」

「あれ、初や、ちよいと水をさして来ておくれ。」

耳を澄したが返事がない。そつと見廻すと、室内が空しく徒に廣いので、少し色をかへて、

「おや、何うしたらう、初。」と、そは／＼する。

「または何でございますか、懲役ですな、懲役にでも參つて、土をあびせられて、血反吐でも吐きましたら、がらりと業が滅しまして、この、嫌な氣持が治りませうかとも思ひましたり、」

と先生は思入つた風情でほろりとした。奥様は座敷に居堪らず、

「ちよいと、あなた。」といつにない片膝立て、ばた／＼して、

「しやうがないね、初、」と獨言をいつて次の室へ小走りに急いで出る、トタンにがら／＼と腕車をつけて、

「お歸！」と威勢の可い聲。

「おや！」と言つて、女中部屋から。初は坐睡つて居も何にもしないの。

「あゝ清、お歸宅かい。」

と母親は大喜び。心配にはなる、淋しくはあり、薄気味は悪しで、待兼てたもんだから、金山から千松が戻つたほどの心持、いそ／＼して出迎へる。初はまた初で、其晩に限つて坐睡はしなかつたから、先刻奥様が呼んだのを、二度も三度も聞いては居たが、渠が所謂資的なるものに顔を見られて、凄眼で睨まれようかと、其が嫌さに返事をしなくつて居たもんだから、一ツは其もあり、やつぱり淋しい處へお歸りで、同じく心嬉しいので、下駄を引掛けると大跨に玄關から格子戸に支ひ棒をしたやうに、ぶつかつてがらりとあけ、其まゝ雨の中の幌際に立つて、

「お歸り遊ばせ。」とお辭儀をした。

車夫は無言で幌を拂つて、前掛をとつて、

「へい、」といつたが、乗つた人はぢつとして

動かないので、初と二人で怪んで見た。玄関でも、
轉がるやうに飛んでおる筈の女が、何うしたこつ
たらうと、母親は氣遣つて、下に置いてあつた、三
分芯を取上げて、少し前へ出て、戸口をすかした。

「清

「お歸宅かい。」

返事もしない。身體が柔らかくなつたやうに俯向
いて、亂れかゝつた前髪の先が、乳のあたりへ垂れ
てる風情、たゞならぬ状だから、突然手を取つて、

「お嬢様、お嬢様。」

矢張ものもいはないで、しかし氣を失つて居たの
でもない。静に車から下りたので、初は直ぐひつた
りと傍へ寄つて、腋の下へ肩をおつけて、

「お嬢様、何うなさいました。」

「あゝ、」と幽かすかに溜呼吸ためいきのやうな答しらへをして、うつとりした顔かほで仰向あをむいたが、さつきから自分じぶんの家の門口かどぐちといふことに氣きがつかないで居ゐたのでもないらしい。其癖そのくせ、色いろも蒼あをざめて見みえるから、

「はやく、初はつ、内うちへ入れるが可いいよ、早はやくさ。」

「はい／＼、」と手てを取とると、案外あんぐわいよろ／＼ともしないで、清子きよこは落着おちついて、静しづかに戸とを入はいつた。

「清きよ！」

「母様おつかさん！」とばかり、身からだ體たいが一いっしよ緒しよになり、抱だいて推おすやうにして、中なかの室まへ連つれて入はいる。

初はつはあとを追おつて、走はしり込こんで、手て早はやく蒲團ふとんを直なほしながら、

「お歸かへり遊あそばせ。」と、も一ひとつこゝせいつて見みた。

清子は立つて、母親郷と肩をならべたまゝ、俯向いて、蒲團を見たが、白足袋の足を揃へてのつて、爪先で踏占めるが早いか、ばつたり腰を折つて踞まつて、小くなつて突ぶして仕まつた。背から腰へかけてお太鼓に結んだ繻珍の帯が、頑固に嵩高で、絹夜具をかけた炬燵檯といった形。袖を手に巻いて顔を蔽つて居るから、乳も見えすくばかりちら／＼肱のあたりも白い、脇あけから襦袢の紅がだらしなく溢れて居る。

「何う遊ばしたんでございませう。」

と初は中腰になつて奥様の顔を見上げる。母親は手もつけられないから尚ほ立つたまゝで、

「清、何うしたの、清。」とおろ／＼して茫乎。簀戸一重おいて三疊があつて、また一重隔てた奥深い、例の油團の冷い上に、先生は話の腰を折られたまゝ、右の如く、頬へ掌をあてゝ、だらりと肩を垂れた、片手を膝に置いて、首垂れてる。格子の外には頻に軒を傳ふ雨垂を氣にして、仰向きながら

黒い合羽の濡れたのに、キラ／＼提灯の影を宿して、
車夫はつくねんと立って居る。

十四

「些少、彼處へお休ませ申しました方が宜しいではございませんか。」

と初はちよいと心着けていふ。

「あゝ、其が可いよ。」

「ぢやあ、お召ものを。」

「手傳つておくれ。」

それといふので、二人で膝を折つて、背中へつかまり、母親はわきから手をまはして、帯占をはずしに懸ると、清子は俯向いたまゝ身體を揺つて、

「ようござんす、母様ようござんす。」と身悶えする。

「ぢやあ、お前鹽梅が悪いのでもないのかい。」

「お嬢様、清心丹でもさしあげませうか。」

と初は心得顔。

「可いよ、」清子は母親が手をまはして帯占を

はづさうとして居る、其手に手をかさねて縫りながら、うつとり仰向いて背を反した。そしておし出したやうに、

「あゝ、恐怖かつた。」と大息をついて呟いたので、初と母親は眼を見合わせる。此時門口から聲をかけた。

「も、う、歸りましても可うございますか。」

「おや！車夫さん。」と初は振返る。母親は気が着いて、

「おゝ、値段をきいておくれ。」

「いゝえ、彼方で拂つて下さいました。」

「さう、ぢやお歸しゝても可いのだらう。」

清子は答へなかつた。母親は何にも知らないので、

「ぢやあ歸かへしておくれ、御苦勞ごくらうでしたつて。」

「はい、」と出て行くのを、何うしたのか、後うしろから留とめて、清子きよこが、

「初はつや、ちよいと、あの、待またしておいておくれ。
」

「何うしたんだね。」と母親はやおやはきく。

初はつは出でた足あしで踏ふみとまつて、あつちと、此方こつちと、あつちと、此方こつちと、等分とうぶんに見みて居ゐたが、ぐつとのみこんだといふ思入おもいれあつて、出でて行く。小走こはしりに引返ひっかへして、忍足しのひあしでそつと來きて、母親はやおやの耳みみに口くち、

「奥様おくさま、交番かんばんへ届とどけませうか。」

としたり顔がほで極低聲ごくこしゑ。奥様おくさまはケズンな面色かほつきで、

「何うしたんだね、何をなにさ。」

「何だつて奥様、あの、野郎にげ足で早く歸りた
がつてをりますもの。畜生！ あんな奴あ酷い目に
合せてやらないと、往來のためになりません。」

とやきもきする。蓋し、車夫が路でお嬢様を手籠
にしたのに違ひない、きつと違ひないと初は思つ
たので。母親は何が何やら、

「清、車夫は。」

「唯今、」ときつといつて、清子はしやんと座
を立つた。

奥の室に影の薄い先生は、めいりにめいつて、つ
く息が見えないばかり。寂然として坐つて、振向い
て此方を見ようともしないで居た。此時、音もせず
浮いてあがるやうに身を起して、縁側を通るにも、
しつとりしつとり一步づゝ、ずらすやうに歩を移し
て、此の中の室の方に來たが、急に謂ふことも無か
つたと見えて、敷居越に立つて覗き込んだ。

此方は其處どころではなかつたので、同じく言も
かけないで、清子は、はら／＼と裾長に立つて出て、
薄色の明石縮に緋の長襦袢をかさね、縹珍の帯で、
足袋を穿いた、餘所ゆきの形のまゝ、あざやかに、
品よく、玄関へあらはれる。

何かは知らず、母親も初もあとからぞろ／＼とつ
いて出る。

清子は判然とした聲で、

「車夫さん、御苦勞でした。」

「えゝ！」といつて、腰を屈めると、清子も簀
戸の蔭へ膝をついて、

「ちよいとお入りなすつて、」と慇懃にいふ。
おや／＼と見て居る母親と初のあとへ、取残され
た先生は一度舊の座敷へ歸つて坐つて見たあとで、
また音もせずのそりと来る。何の事はない、此人
の歩行くさまは清川の内へ縦横十文字に黒い棒を

引^ひくやうなものだ。

あれまでだった大雨が十時過には餘波なく晴れあがつて、第六天の樹立の上に半輪の月が出た。蝦蟇の形をした黒い雲が目白の天に唯一ツあるばかり。空は恰も拭つたやう。こゝに同 東京の中でもまだ足を入れたものはあるまいとも思はれる、切支丹の崖には樹が茂り、草が茂つて、下の細道は甚だ暗い。瓦斯燈が二ツ三ツ幽な灯でぼんやりして、低い處に灯されて居るし、石垣に立てかけた角の切石が五六枚濡色を見せて青く光つて居る。

小溝には水が通つて、白い處、黒い處、きれ／＼になつて淀んでゐる。寐静まつた小屋の前に、牛乳配達の荷車が曳据ゑたまゝで置いてある。この家四五軒あるあたり、屋根の後がまた森で、茗荷谷から臺町の方へ斜に續いて樹の梢が、高く、低く、みだれ重なつて、折から颯と吹いた風に、波頭が立つた様だ。立

其時横亂れに鼻を掠めて眞白な頬へ吹かれかゝつ

た後毛を拂ふとて、引あげて居た襦を放すと、ひら／＼と裾が亂れて肱をあげた袂が靡いた。

其まゝ坂の下に立停つて、

「まだ來ないよ、何うしたんだらうねえ。」

これは先刻築土前へ歸るといつた雨中の美人で、如何したのか此處へ引返したのである。

「道が違つたのか不知、それとも、飛んだめに逢つたんぢやあるまいかね。」

一體縁起でもない、「さきのこととは分らない」などゝいふ皮肉をいつて分れたので、得てさういふことは何かの兆となるものだ、とさう思つて、案じるので。目白の十時が聞えてから、また小半時も待つてたが一向歸つて來ないので、雨は上つた、涼しくはなる。風も吹けば月も出て、濡れた衣も快いので、ぶら／＼大塚の方へ荒物屋の軒下から出かけて來たので、あゝいつた我まゝものは、女だつて、

何、道の淋しい、人通りがない位に頓着はしないのである。

「ま、もう少し少行つて見よう、」と行さきの道の暗い中を見透さうともしない。のんきに仰向いて樹の梢から屋根の上、電燈の柱の尖と、順繰りに月の形を見送りながら、かはる／＼足をあげて、濡れた路を踏み／＼歩行く。蛙がはら／＼と足下から飛込んだ。

やがて溝の上に石垣があつて、茂った森が處々に三角形になつて居て、黒い天幕を張つたやうに見える廣場へ出た。

横合から、キヤツ！と魂消つて、飛附いて、少し驚いて身を開く細腰へぐウとしがみついで、

「おほ恐怖。」

といひながら、。ペロリと舌を出した野郎がある。

女は抱きつかれた腰と一所に、兩手をおさへられたが、ビクともせず、其まんまで、ぢつと見ると、丈の低い肥つた男で、白く蝙蝠を染めぬいた浴衣を着て、三尺帯を横腹で結んだものだ。

「おや、何處の田舎ものだか、一寸。顔を見せな、一寸、顔を見せなつたら、」と平氣でさういつた。野郎は顔を隠したまゝで、

「知れたことだ、私の顔は昔から人間に似てるんだい。」

「ほう、お前、此間大日様の縁日の時、人込の中を行つたり來たり、満類屋の前を五六遍も通つて、張つてあるいて居たぢやあないか。」

「何だと。」

男は手を放して眼前へ立つた。女は指のさきで、肩をはじいて、莞爾して、
「些少あ小遣が出來たのか。」

「何^{なん}だと。」

「今夜^{こんや}、幾^{いく}千^{せん}か持^もつてるかよ。」

「え。」

「何^{どこ}處^こかへつきあつてあげようか、チヨイといく

らばかり持^もつてるんだ。」

「何でえ、何をいつてんだい。」
 と、強味をいひながら内心頗る恐慌で、大し
 よげの體でしりごみをする。

「おや、何にもねえのか。」
 と笑ひながら、銀杏返の根をがつくりさせて前へ
 出ると、男はまた一步退つて、上眼でじろ／＼と見
 ながら、

「何、いつてんでえ。」
 「無錢ぢやあいけないやね、お前悪い癖だ。一體
 帽子會社の工女なんか山の手の女は無錢なんだら
 う、其でお前なんざ、無錢で情婦が出来るものと思
 つてるんだね。悪い料簡だ。些少仕事をして二歩ば
 かりも拵へたら、くらやみを探さないで、魚燈で
 も可いから板橋へでもしけ込みな。彼處の女郎は素
 裸體で寝るさうだ、夏向や結構よ。」

と好きなことをいふ。波切不動の裏手ぢやあ、これ

でも雀の子を噪がせる。鹽煎餅屋の女だの、角の車屋の姪だのには、肩をたゝかれる色男で、まづ大塚では己だらうと、納涼臺の上で脂下るものだから、よせば可いのに、しらふで、頬被りもしないで、飛んだ見損なつた串戯をして、哥兄こツぴどくはたかれた。

で小角觥の一つも取らうといふ男であるから、力にかけちやあ、さきは何だつて婦人だもの。腕を捻ぢて、足捌をかける分には、仔細のない事ではあるが、あまりの度胸に呑まれたので、呆れて、茫乎して、大きに、とつちて、恐らく人間の女ぢいやなからう。魔物だとばかり思ふので、手を出す處の騒ぢやない。

「何かいつてら。」

と苦笑をして、まさかに遁げるでもあるまいからと、のツそり彼方向いて行きかけると、慰む気か、意地の悪い、後から走り寄つて、

「ちよいと、待ちなよ、これ！」

いきなり其腕を取つて、ひつたりくつついて、

「さあ、其處いらまで一所に行かうや。」

と持った手に力を入れて、前へ立つてグイと引張つたから、おど／＼して、まだ年紀が若いのさ。

「御免ねえ、姉え、御免ねえ、ほんの出来心よ、串戯だ、御免ねえ。」

と眞面目になる。

「さうさ、お前串戯でなくツて何うするもんだ。」

「だからよ、堪忍してくんねえ。」とます／＼眞面目で、わびをいつて、もがいても放さぬので、弱り切つて、

「ねえ、ねえ、巡査が来ると悪いから。」

女をんなは覺おぼえず噴ふき出だした。

「ほゝゝ、何なんだ、お前まへ達たちあ情いろ婦ろが出で來きると一いち々／＼交かう番ばんへ届とけるのかい、馬ば鹿かにしなねえ。しと、誰だれもお前まいの叔を父ぢさんにいッつけよ、うとは言いはないから、安あん心しんして一いっ緒しょにおいでよ。」

「へい。」

といつたきり、まじ／＼ついて來くる。

「何どうだね、些ち少つとは女をんなの子こから附つけ届とけでもあるかね。物もの氣けが高たかくなつたから當たう節せつは皆みながしまつてるだらうねえ、小こ菊ぎくや手て拭ぬぐひに不ふ自じ由いうをおしだらうね。」

とじろ／＼扮み装なりを見みられるので、もぢ／＼して浴ゆ衣かを搔か合あせて、固かたくなつて、言いひにくさうに、

「え、姉あねえ、此こ處ゝらで、えゝ、ちつと用ようがありま
すから、お前めえさんお前さきへ。」

女もさまではと思つたか、盆に來いで放してやつた。

「それぢやあ……きちつと遊びに來るさ。」

「お前さん、何處だね。」

と改まつて問ふ顔を、女はキツと見たが、頷いて、
「築土前で髪結と聞かさ、お欽、とさういや分る

よ。」

「いづれ。」とばかりで小走りに分れたが、ずつと放れると辻のあたりで、――「どうすりや

よかる。」――と唄ふ聲。

十七

「罪がないんだね。」

とお欽は見送つて、莞爾して、「お、そりやさ

うと何うしたらう。」

再び大塚の方に向いて歩き出したが、多くは行かないで車の音が聞え出した。立停つて耳を澄すと、違ひない、やがて提灯の明がちら／＼見えて、ずっと間近になつたが果して其だつた。

待構へた車夫だから、見ると聲をかけて、

「今歸つたの。ちよいと遅いぢやあないかね。」

「え、誰方。」と、すかして立つ。

「私だよ。」

「む、先刻の姉さん。」

「あゝ、私さ。お前さん何をして居たんだね。」

「いまゝで待つてたんですが、何うもこんなことがなけりや可いと思つてた。」

「何だとえ。」

「いえ何、おそくなつたから、もう疾くにお歸りなすツたらうとばかり思つてたんです。」

「だつて、理窟なしに来てくれないやうな人ぢやあないと思つたから、何だか氣に懸ることをいつてお出だが、また怪我でもしたんぢやあないかと思つて、わざと此處まで見に来たんだよ、ちよいと實がありません。」

とあでやかにお欽は笑つた。車夫は禮をして、

「そりや難有う存じます、折角待つてちやあ下さつたし、其に行懸りにもなつてますから、誠にいひ悪いわけなんですが、姉さん。」

「はあ。」

と眞顔になる。

「何うもお供は出来ませんよ。」

「いけないの。」

「え、お氣の毒なんです、何いうも、こんな
ぢやあるまいと思つてたのに、足の踏抜がお前さ
ん、恐しく痛むんです。かうやつて歩行いてさへづ
き／＼するんで、困つた、もう二三日ア仕事も休ま
なきやならないやうですから、悪く思はないで、姉
さん、御免なすつて下さい。其かはり私あ云つたこ
たあ違えませぬ。ずん／＼曳けるやうになつたら遊
山をする氣で一日朝ツからお乗んなさい。丸の内か
ら新橋までを六分間で駈けてあげまさ、眞個です。
私あ新小川町の綿屋が店子で信てえもんですから、
串戯ぢやアありません。」

とあらたまつて屹としていつた。細面の信の顔を、
お欽はぢつと見て居たが、おとなしく頷いて、

「いゝのよ、何、そんな心配をしなくツて、いゝんだよ。私も近所だから一緒に歩行きませう。そして、澤山痛みますか。」

連立つたいま車夫の足許を見て、お欽はきづかはしさうな様子である。信はあげ足で一步步々氣にかゝるが歩きやうで、覺束ない。

「不思議に痛むんです、何うしたのか知らん。」

「其は嘸お困りだらうね。だけれど、あの、お樂みさ。細君が介抱をしてくれるわ。」と冴えた調子。車夫は投げだしたやうに、

「なあに、もう鼠になめられる位が落なんで。」

と往來の溝にがつたりさせて、空車を曳いてあげる。

「おや／＼、それぢやあひとりものなの。」

「媽々んなんかありますか。」

「ありますかは邪険だねえ、それぢや親御様は。」

「二人とも此地にや居りません。」

やせ形のがた小造こづくで、車夫くるまやに出来たといふからだ身體ぢやあ
ない。お欽きんはならんで歩ある行きながら、アノ凄すこい眼めで、
あらためて車夫しやふの風采ふうさいをちよいと見みた。

「不自由ふじゆうをおしだらうね。」

と、心こころありげにさういつた、が、車夫しやふは冷れい淡たんであ
る。

「何なに馴なれツこになつてますから、つひしか不ふ自じ
由ゆうなんてことをもの珍めづしく思おもひ出だしもしないんで
ね。」

「いけないねえ！」と高たか聲こゑでいつて、お欽きんは片かた
頬ほに笑あはれを含ふくんだ。

「ちいつと覺おぼえさしてあげませうか、不自由ふじゆうな事ことを知らないと、お前まへさん身からだ體たがきまらないよ。」

「御深切ごしんせつさま。はゝゝ、」

と快こころよげに笑わらつて黙だまる。

十八

「串戯ぢやあないよ、あれさ、眞個だわ。些少不自由な味も知つておいでなないと、思ひやりがなくツて、お前さん、待つてるものゝ氣も分らないやうぢやあ憎らしいではないか。今夜のことは足が痛いので、それで晩くなつたんであらうけれど、」

「いゝえ、さうぢやあないんです。痛むツたつてこんなにして歩行けますもの。そんなこツて晩くなつたんぢやありません。」

「おや、それぢやあ何うしてね、」

とお欽は思ひ出したやうにあらためて聞く。

「別に。何、」

「いゝえ、聞いて頂戴。」

「何、別に。」

「いゝえ、聞かなくツちやあいやよ。」

「何の彼のと込入つてゝ面倒ですもの、ちつともお前さんの身にかゝつたこつちやあないんですから、言はなくツたつて可いんでさ。」

「いゝえ聞いて下さい。」

お欽は意地になつて、聞かないでは濟まなくなつた。車夫は舌打をして、

「困つた、面倒臭いなあ。お前さんは女の足で、唯さへのろいのに、話しながらだから容易ぢやあねえ。」

「ふん、」と笑つて、「足を痛めてる癖に、大きなこといつてるよ。ぢやあ可いから急ぎませうか。車夫さんてものは駈けながら、お客と話してるもんだよ。可いからお駈けなさい。私だつて駈けるわ、負けやしない。」

車夫は苦笑をして、

「何にもそんなに意地におんななさらなくたって
可いやね。」

「だつてお前さんが悪いんだもの。誰が何とかい
やあしまいし、私あ唯足が痛いせみだとばかり、さ
う思つて氣もつかないで居たんだのに、自分でそん
なことをいひ出すからさ。散々人を待たして置いて、
何をして居たんですか。さあ、おいひよ、いつてお
しまひよ、聞なくツちやあ嫌よ。」といふ。

「困つたなあ、ツイ、違つたからいつたんだが、
よせば可かつた、ぢやあ話しませう斯うです。」

「何うです。」笑ひ／＼梶棒について、車夫の
顔を見ながら歩行いて居る。

「いま姉さん、お前さんにお目に懸つた彼處から
さきは眞暗で、舊化榎といふのがあつて、名代な處
でさ。いまでも晝見ようもんなら薄氣味の悪い切つ
株が残つてますがね。大きな樹の枝が天窓に支へさ
うで、片方の崖は草が茂つて、お前さん、葉のさき
で眼を突つきさうな處なんで、道は狭し、ほんの纒

な間にや纒の間ですけれど、まるで、物音も聞えないで、穴中へ入るやうな路ですがね。さつきなんざ、提灯を押つけても足許も分らない位でせう。餘り淋しいし、乗つてた大塚のお嬢様は身動きもしなさないやうだから、何だか案じられるやうな氣もしましたので、淋しい處でございますなんて、二ツ三ツ聲を懸けて見ましたが、さうかとも返事がないから、をかしいなとばかり思つて、ま、其まんまでお邸まで送りつけましたさ。

それからお前様、お歸！　といふので玄關から門の内へぱつと明がさして、夫人と女中とが立つてるので、直ぐに車をつけて、下さうとすると、何うです、お嬢さんがお前さん、まうつむけに眠つたやうになつて居て、やう／＼あげなすつた顔の色が眞蒼ぢやありませんか。

内でも驚いたでせうさ、私も吃驚したんです。」

「すると女中衆が飛んで出て、肩にかけやうにして下したんで、夫人も酷くうつたと見えて、格子戸の處まで走つて来て、連込みました。」

そして私にちつと待つてるとかういふこつたから、お前さんの事はあるし、直に歸らうと思つたんですが、何だか其様子ツたら、まるで私が道でおどかしでもして、其でそんなになつたとも思はれたやうだから、打ちやつちやあ置かれません。

で、しばらく待つてましたら、お嬢さんが帶占も解かないで、白足袋を穿いたまゝで、今度はしやんとして、奥から引返して玄關へ出て來なすツて、車夫さん、と丁寧^{ていねい}に手をついてものをいふんです。

誠に申譯のない、はじめ神樂坂を乗つて出た時は何とも思つちやあ居ませんでした、——路でだね、——それ、姉さん荒物屋の前で私が草鞋を穿いてる時に、お前さんが何かいつたでせう。あの時なんです。

お嬢さんのいふにやあ、車夫さんが、あの髪結のお欽さんに、いや、人間、さきのは分りませんだの、何んな目に合はうやらだの、なんのツて、いふもんだから、別に遠い道ではなし、大塚へ来るのに峠一つ越すといふでもないのに、譯がなくツて、そんな嫌なこといふ筈はないと思つて、濟ないけれど、疑つたと、斯ういふんですね。ひよツとした出来心で、何んなことを仕出來すのかも知れないと、さう思ふと、急に恐くなつて、もう乗つてる瀬がなかつたので、すぐアノ場から下りようとしたけれど、下しちやあくれず、まさか口へ出していへることはないから、たゞ下りようとしたのを、お欽はお欽で自分を庇つて、左様するのだと思つたのか、お辭儀をする。

もう／＼何ういふ目にあはうやらと、ひや／＼して、乗つてるうちに第六天へ入つて、茗荷谷へかゝつてからは、まるで人通はなし、家はなし、こんな處でと思つたら

だつて、姉さん、私を飛んだ悪黨に見立つたんだね。

「馬鹿にしないねえ。一體そんなのを女氣だなんていふのだけれど、全體色気が過ぎらあね。いや、十七八だ、また年増だ、夜中に一人ぢやあ歩行けないなんて、誰がかまひてがあるもんか。」

そりやあのお嬢さんなんざ、私らが目にもふるひつくやうな容色だから、まあ、可いさ。人にいたづらでもされはしまいかなんて、恐怖ながるも無理ぢやあないが、何の人、下さらない顔色をしながら、一人あるきが出来ないなんて、皆が目をつけて何うにか、からかつてゞもくれるやうに、自惚れてるうちが可い、ねえ、お前さん失禮だあね。」とお欽は昂然としていつた。車夫は珍しげに女を見て、

「大層男を贖てくれるね。」

「お前さんもね、女が女の肩を持つてた日にや、男が浮氣になつて仕やうがないわ。」

「へい。」

「まつたくよ、だつてお前さん、さうした日にや

あ、寝取られた女に禮をいはないぢやあなりませ
んもの。私なんか男が鼻屑さ、はい、女同士は敵
だと思つてます。」

「なるほどね。しかしアノお嬢さんなんざ、感心
だ。

だつてさ、何も此方は心着かないのに、故と打出
して、譬ひ道なら十町足らず、時なら十分の間でも
飛んだお疑ひ申して濟みません、黙つてしまつちや
あ寤覺が悪うござんすからツて、夫人を後に置いて、
顔を赧くしてわびましたせ。姉さん、お前さんのや
うなものも少ないが、あんなのは又とありません。」

「そこで、惚れましたか。」と、だしぬけに第
六天の曲角でいった。

車夫が清子の言に服して去つたそのあとで、先生は人の後に立つて居ながら、母親だの、初だのが奥へ引返して入る、其あとへまた清子が續いて入らうとする、咄嗟の間に妙なことを考へた。

先生の様子といふものを知つた方は御存じでもございませうが、財産は叔父に奪はれて、祖先の祀は絶えるし、母様はそんなわけで、叔父に世話になつて居て、「遺言は聞いて遣るから呻吟いてくれるな。」と叔父にはれた時も、傍に居合せて、煙草をのんで居た人なり、殆ど生命を賭にしたといつて可いほどな、言語道斷の辛勞で、漸く發明した方程式の解法は、天下、ものゝ役に立たず、然も結構性の肺といふので、いつも知れない身體なり、近來は衛生といふものが恐しく進歩したので、すべて美人でないものゝ肺病は恐しいものにして、一般に擯斥して、ちと傍へ寄つてもいはいはうもんなら、利いた風な。ずつと遠くへ退いて、「御病氣は？」などゝいふ、頼もしくない世の中に、何

がおもしろくツて生きて居よう。

數年間これを枕とし、糧とし、命とした石盤を與へた兒がかつたゐの兒であつたのも我慢した。

叔父が胃病で、粥のなかへ鶏卵の黄味ばかりを入れて食べたあとの白味だけ……残つたのを、母親はなまぐさくて嫌だといふので、「資にやれ、身體の補になるのだ。」ツてくれるのを貰つて、禮をいつて、一口に一口體量がふえるやうに、穀からちゆう／＼吸つたのも何の爲だ。

よくなりたい、なほりたい、健康を復したいと思へばこそで、其なほりたいのは、叔父に復讐をしたいからでもない、母親を諫めたいためでもない、家を興したいたためでもない、名を擧げたいためもなく、唯盡く清子のためで。

清子のために、先生は叔父のことで口惜くツて無念だ／＼と思つて寐た晩、恐しく切齒をしたので、神明様の馬の食あらした豆を食へといはれた時も辛

抱した、お櫃の洗落を毎日食べさせられるのも我慢して居る。そして衣服を着て、飯もくつて、ものをいつて、いまゝで居るのだ。

舊學校へやとはれた時、はじめて見てからいまに到るまで長時日間、殆ど一日の如くに思つて居るが、いかに代數式を考へるために半生を捧げた先生でも、お藥師様の獻燈に「ほとゝぎす」の句を出した獨歩生でも、「何世間で何をいつたつて構ひません」と濟した人でも、哄然としておさんどの尻を罵倒した客人でも、病氣を治すために竹の筒へ髪を入れて、棺桶と一緒に出して貰はうかと思つてる迷信家でも、懲役にでもいつたら氣が變らうかとも思つたりする患者でも、とてものことだ人殺！といふやうな狂人でも、其位なことは知つて居る。そんなことは分つて居る。實際、自分を清子の婿にといふことを、清川の女主人が諾するものか、しないものか位は推斷し得るのである。

けれども清子が自分を夫にといふことを、諾するかしないかは、迷つた氣でいまだに先生は如何とも

自分で断定しないので、つまり此まよひが去らない
ために、ぐづ／＼生きて居るのだといつても可い
だ、こんなに入浸になつては居るが、迂濶にいひ出
して斷られたら取つて返しのつかないことゝ、一言
いつて二言めにはいひ出したいのを堪へて居たのに、
ぐんづらものゝ事出來し。車夫に對してゝ純潔な、
氣の捌けた、すつきりした、蟠のない、わけの
分つた、清子の今夜の仕うちを見て、母親と初とが
奥へ引いて、あとから清子が行かうとする、其の瞬
間に、氣の疾い！ これは打出していつて見て可い
事と、さそくに先生は思つたので、何うやら衷情を
愍んでくれるやうに考へたのである。

母親は此時眼中に先生なしで、背後に立つて居るものを、其處に居るかといふそぶりもしないで、小刻の早足で引返す、初もばた／＼と引込んだ。あとから清子が行かうとするのを、不意に、

「清子さん、」

と、呼んで見た。

いつもならこんな時に、しかも、かういふ風に暗い處で、あの蒼い顔を見せられた日には、あれ！
 とも言ひかねないのであるのだけれど、清子は恐い／＼と思つて居た道を無事に家に歸ることを得て、飛んだ生命懸の災難をのがれて、うまれかはつたやうな氣もする上に、氣に懸つた車夫には意中でしひて居た謝罪をしたので、懺悔をしたあとのやうな爽快な念を感じて居るばかりでなく、同時に不斷不快を抱く先生のことも聯想して、これはまた突拍子もない、月鼈雲泥、あゝ、悪かつた、いつも來る先生

が何か我身に氣があるらしいので、嫌だ／＼と寐ざめにさう思つて居たのであるが、人は思ひ寄りぬ潔白なものだ、めつたに疑ふものではないと、車夫のことにつけても心着いた處であつたので、

「先生、入らつしやいまし、」

と快く軽い調子で、返事をした。まづ口切の工合が可いので先生も大に力づいた。

「いえ、もう歸るのであります。」と何か思ふ處があつたらしいが、こんなことは幾度もあつた習ひで、顔を見る、直に歸るとなつても、清子はさして變だと思はず、

「もう、お歸りでございますか。」

「え、歸りませうと思ひます。」

「まあ、宜いではございませんか。」と清子は珍しく先生に對して澁らないものいひであつた。

「いや、また、」と先生は清子に面して挨拶をした形のうしろ向のまゝ、爪さぐりに下駄を穿いて、土間へおりて、戸の際でちつと振り返つてつむりをさげた。

「お歸り遊ばすの。」と清子は立つて見送つたが、あまり丁寧にされるので、そればかりではと思つたか、いつになくおなじつゝかけ下駄で土間へ下りる。

「さやうならば、」
すかして戸外の通を見ると、先生は二三間さきへあるいたが、不圖立どまつて見返つて、

「あゝ」

と思ひ出したやうに、――「蝙蝠傘を、」
と呟いた。

清子は氣を利かして見知越の、粗末な、先生の持物を持つて、何心なく小走に追つて出て、

「先生、これでございますか。」

「いや、」これは否しからずといったのではない。

「はい。」と差出したのを、先生は受取つて、

「晴れました。」

とあたりを見ながらいった。

「大分お涼しくなりました、先生、」

清子もあとさきを見ながらいふ。

「星が出ました。」

「はい、」

大塚の通は森として、板橋がよひの追分が遙はるかにきこえて、竹早町の交番の紅い燈と青い星の光がする。

「あなた、」

清子は薄寒くなつて、何だか知らない、其聲をきくと、身が竦むやうな思がした。

「清子さん、私は他に別にいきてゐる必要はないのであります。」

といきなり手を取る。清子はわな／＼と慄へたのである。

「もう此望が叶ひますれば、かやうな身體ではありますし、其まゝ私は死ぬのであります、」と先生の聲もふるへてきこえる。あれ、ともいはず唯もがいて、振返つて遁げようとするから、力を入れて握り緊めると、ひき呼吸で、身をあせつて、

「あれ、母様、」と聞えぬながら叫んだので、慌てゝあの漉團扇のやうな平ツたい大きな掌の、生あツたかいので、ぐつと清子の口を蓋して、

「こんなに思ひます。い、命がけで、えゝ！」

と拳こぶしをにぎる力ちからを入れて、細い眼ほそめを二みひらいたが。清きよ子こが褻つまを亂みだすまで、脛はざも見ゆるまでもだえるので、落膽がっかりして手てを放はなすと、せめて衣紋えもんでも繕つくろふことか、其そのまゝつツと走はしり去さつた。

あゝ、さいは投げられたのである。

先生せんせいは悄然せうぜんとして、仰あふいで大塚おほつかの天てんを見た、鴉からすが鳴ないて、何處どこかの牛うしの吠ほえる聲こゑ。

お欽きんが第六だいろく天てんで蝦蟇がまの形かたちの雲くもを見みたのは、ちやうど此時このときと時ときを齊ひとしくするのであつた。

「何處だ！」

一喝を食つてギツクリ顔をあげると、巡查が肅然として立つて居た。切支丹の上の四辻で、先生ははじめてわれに歸つたので、不意であつたから、思出したやうな顔色である。巡查は少し調子を低く、聲を和げて、

「何處へ行くんか。」

「傳通院前へ歸るのであります。」

「むゝ、傳通院前は何處か。」

「……古着屋に居るのであります。」

二三歩ツカノと立寄つて、

「お前、其では道が違ふではないか。」

先生はいつでも本通を通らないで、裏町から大塚へ出る習であつたので、ちつと考へごとをして我を忘れて歩行いたけれど、知らず／＼餌差町の方へ曲らうとしたのであつた。

「えゝ！淋しい處をと思ひまして、」

これは解し難い言である、些少容子が變だつたので
巡査は咎めて見たんだけれど、さして怪しい人の
やうでもなかつたから、何か腑に落ちない處もある
けれど、強て咎立をするにも當らないと思つたらし
い。

「一時すぎに、何だ、淋しい處をよつて歩行かん
でも可え、素直に歸れ、素直に、うむ、」

といひすてゝパクノ、寐靜まつた堅い道に靴音を
印して去る。

「ふむ、」とまた呼吸をついて胸を折つて、腰
を屈めながら、先生は腕組して、それから急ぐ氣に
なつて、叔父の家の前まで來ると、内ではハヤ寐た
様子。さいはひ犬にも吠えられず、さすが閉出しも
くはさない。大戸の間は指の入るほどすかしてある。

先生はひツたり額をおツつけるやう、戸に面して

悄然しよんぼり立たつて、中指なかゆびのさきで戸袋とぶくろへ何か棒ぼうをひつぱつて書かいてたやうだが、振返ふりかへつてまた軒越のきこしに月つきを見た。嫌いやな／＼顔色かほつきである。

やがてコト／＼と戸とをあけて、あとじまりをして、店みせへ入はいると、あかりはつけてない、次つぎの室まに寐ねて居あるのは、叔父おぢと、容色きりやうもの／＼母様おつかさんで、この古着屋ふるぎやは二室ふたましかないのである。

例れいに因よつて先生せんせいはあかりもつけず、そこいら手探てさぐりにあたつて見みると、ぼろ切きれと綿屑わたくづとが生なまあつたか暖に手て尖きにさはつた。直すくその傍かたはらの處ところに着きて寐ねる夜具やぐが戸棚とだなから出だして轉ころがしてある。

其そのまゝのべようとせせず、ぐつたり坐すわつて、アノ頬ほぺたへ手てをあてゝ膝ひざに手てをかけて背せなかをまげて、うつむいて、ぢつと物思ものおもひをして居あた。が、ばたりと横よこになつて夜具やぐの襟えりに突伏つつぶすと、じと／＼する濕しめつばい、甘い香あまがした。

堪たまらず仰向あをむいて大おほきな掌てのひらで天窓あたまを抱だいたがニツ三

ツ續けて咳入った。

「誰だ、」と障子のあちらの次の間で聲をかけたのは、眠むさうな、考へてたやうな叔父の聲だ。

「私です、」と先生は、ものを被つたやうな聲で返事をする。

「遅いな！」

とけんどんにいつたぎり、ばかりと寢返をした音。くらい中で、母親が白い腕を折曲げたやうに先生は胸に浮んだ。トタンに思ひも寄らないことだが、何か長い鼈甲の巾着が障子越の次の室にあり／＼と見えて、何うした拍子か、ものに觸れたやうな音で力チリ！

先生はすう／＼といふ引き呼吸で、うつとりとなりながら、あゝ出たい、こんな内に居るのは嫌だ、遠い處へ行かう、股引を一ツ盗んでと、他愛のないことを……うつら／＼と昏睡した。其夜のうなされ方といふものはなかつたさうだ。

築土前の女髪結でお欽といへば聞えたものだ。わがまゝで、容色がよくツて、意地の強い張のあると皆がさういふ。元來長屋出の婦人ぢやあない。舊は砂土原町の玄關構で、篠原といつて三夫婦あつた有名い家のお欽は一番若夫婦の姉娘である。明治八年庚申の月に生れたから、金といふ名をつけたんだが、ちいツと小兒の内お轉婆が過ぎたもんだから、曾祖父さんの節堂といつた、漢學者で、日本外史が大好きであつた人が心あつて、金を改めて欽といふ字に直したといふ、欽はつゝしむとか訓ずるさうだ。中の祖父さんは黒い八字髯のあつた、歌よみで、おとつさんといふのは年紀が少くつて何をして居た人だかこれは知れない。極めて好い男だつたが、養子なんので、母親は家附の女で、丸鬚と、繻子の帯と中形の浴衣がよく似合つたこれも美人で。養子と一所に内に居たり、居なかつたり、半歳も何處へか行つて居たり、また三月も内に居たり、母様が内に居て、父様が居なかつたり、父様が内に居て、母様が居なかつたり、ばつたり居なくなつて一年も經つて、

いろんな風説もなくなる頃、突然神樂坂の縁日を派
手な姿でぶらついて居たこともある母様だつた。お
欽は篠原家の令嬢なんだけれど、其令嬢欽子として
覺えたものは一人も居ない。況や築土前のお欽さん
が、舊は篠原家のなぞといふに於てをやで誰の念頭
にもないことである。

十六七の頃の繻珍の帯をお太鼓結で、女中を連れ
て歩行いた姿を覺えて居るものはないが、いま名古屋
で陸軍の大尉をして居る何某とかいふのが、曰く
何だか知らぬが、若い時に、父親の用で、篠原の隠
居に逢ひに行つた時、夜の十時頃だつた。縁側を通
つて四疊半へ曲らうとする、角の六疊の眞中に薄暗
い行燈の下で、後向の、がつくり島田のもつれ髪で、
手絡一つかけちや居ない、柄のあらい棒縞の綿人の、
しつとりしたのを引摺つて、下占ばかりだらしなく
結んだのが、立膝でうつむいたが、眼が悪かつたの
であらう。紅の切の大きいのを雪のやうな片頬へか
けて、眼をおさへながら肩のあたりをぶる／＼さし
て、うごき泣をして居た十八九の美人が居た、彼家
の女が、親類の女が、何だか知らぬが、凡そアノ位

な女は見た事がないがと、思ひ出しちやあ談話をす
る、其が其欽子だったので。お欽が令嬢であつた内、
人の記憶に留まつてるのは、女子が黄金時代の内に、
其の事ばかりである。いま一つ其はキリッとした
単衣姿で、極暑の時、其時は何うしたのか、餘り扮
装のよくない、小股のしまつた狭なのが、女の癖に
腕組をしながら少しうつむいて、蝙蝠傘もささない
で、箆笥町吉熊の前の日向をすた／＼歩行いて居る
と、いろはの方から、二頭立の光つてる馬車が来て、
馬丁が三人ついて、一人乗つてたのが、大華族の若
殿であらうと思はれる、黒い柔かな髪の戻りした、
額の小さな色の白い、恐しく顔の長い、頤の短な若
様で、軍服で、剣を下げたのが通りすがりに向うか
ら件の女に眼を注いだ、馬車とすれ違ふ時は横ざ
まに位置をかへて、ぢつと見た。通りすぎると捻向
いて、恥かしくもなくツてか、ずつと／＼見返つた
のを馬車の音で立停つて、おつたまげて見送つてた
往來の者が残らず知つて居る。中に成城學校の生
徒があつて、一禮を施した位だつたにもかゝらず、
女は知らぬ顔で、風が吹いたとも思はぬ様子で、す
れ違つた時も眼をあげて馬車を見ようとせせず、一

向平氣で、冷淡に澄し切つて、無意味なあるきぶり
でさつ／＼と寺町の方へ曲つてしまつた。アンなの
が玉の輿だ、旨く乗つたか乗らないか、と時々今で
も風説されるのが、何うしたものか、人は知らない
が、あゝ、築土前のお欽さん！

二十四

「お駒さん、チヨイとお駒さん。」

午前の九時少し過ぎる頃、お天氣のいゝ日、築土前の小意氣な格子戸を内からがらりとあけて出て、お欽は向う長屋の戸に立つて聲を懸けた。當歳の兒を抱へたとはいふ形で、風呂敷包を胸の處に抱いて居る。

「お駒さん、モシ、ちよいとお駒さん。」

ゆうべ、ほとゝぎすを聞いたせみか、まだお寢つて在らつしやるのであらう、返事をしないから、ずツと寄つて、明窓に口をあて、

「金龍さんのおいらん、おいらん！」

と少し低聲で呼んで、莞爾笑つた。ところへ、このお長屋中を稼いであるく、宿無しの斑犬が路地口から突進し來つて、ぐるりと廻つて裾に搦んだから、叱！ といつて手で拂つたが、人立して胸の處をな

めようと、とち狂くるふので、止やむなくつくばつて天窓あたまを撫なでた。

「何どうしたのさ。」

「あゝし」

といつて寢返ねがへりをした。――氣勢けはひがして、やゝあつて吸殻すひがらを拂はたく音が、丁おと、と聞きえ、する／＼衾ふすまから起きて出でて、

「お早はやう、」と窓まどを開あけて、路地内ろぢうち一面いちめんの日向ひなたに、昨夜ゆうべの顔かほをいきなり出だしたから堪たまるものか、

「おほ。」といひながら後うしろへ退すきつて、掌てのひらで涙なみだを拂はらつた。寢起ねおきの姿すがた、さめ／＼と涙なみだ含ふくめり、朝櫻あさくらといふ趣おもむきがある。

ちやうど此この時ときだ、井戸いどの縁ふちに汲くみあげてあつた芻釣はねつる瓶べがギイなと鳴なつて、引ひくりかへつたのをキツカケに斑ふちを突ついて、

「そらよ、」と推退けてお欵は立つ。お駒はやう／＼眼が日光に堪へ得るやうにハツキリとなつたので、再びはれぼツたい顔を出して、

「恐しく早いですね。」

「は、お前さんの方が。」

「お断には及びません。」

とあでやかに笑うて居る。白粉垢で襟がしつとりとした中形の浴衣を着た寐衣のまゝで、帯は寢床なる枕許にたぐつてある、枕は蒲團から落して今起き出る時に疊へ橋に渡した、蚊帳を片はづしにした上から小さな鳥居を立つた白木の新しい神様棚が見えて、一室が薄暗いのに、細く吸殻の煙が立つて、ぼんやりと白く光る、お燈明が未だ灯れたまゝ残つて居る、夜更をするのであらう。

「昨晚は。」

「は。」 とばかりで頷いた。

「大層お邪魔をしましたね、早くから眠い處を。」

「いゝえ。」 お駒は心安く打消して、

「お上んなさいな、澤山談話があるわ。」

「のちほど。」 といつて少し考へてたが、
つとお駒の顔を見て、フゝと莞爾して、

「ぢやあチヨイと。」

くるりと身を返すと、むかうでも起つて内から
くるゝを外した。お欽は急いで入つたが、上らうと
はしないで框に腰をかけて、下駄を組み違へて少し
仰向いて路地を見たが、振返つて奥を覗いて、

「お駒さん、少し。」

「お上んなさいな。」

寝て居た南向の雨戸を一枚繰ると、枕許へ。パツと太陽がさして、天鵝絨の夜具の襟が白ぼけて神棚の灯に、うつる。

「よ、どっこい。」

といふ懸聲で、蒲團の眞中を取つて、引ずりの寐衣の裾だらしがなく迂りさうなのを踏占めながら、押懸るやうに下から捲いて衾を隅へ片寄せる。

「さあ、明きました。」

お駒は枕許へ片膝立て、悠々と呑みはじめた。

「さうしちやあ居られないんですから。」

「さうでもございませうが何うぞお上りなすツ

て。」「とわざと慇懃にいふ。

「可いや、そんなにいふんなら、マ、あがつて遣れ。」「と清い聲で優しくいつて包を框へ下したが、

「チヨイと斑ぶちが入はるでせうが。」

「さうね。」

「閉しめて置あけ。」 とばつたり、 「はい、今日こんにち

は。

「何どこ處へ。」

立たつて來きて火ひのない長なが火鉢ひばちの前まへへ坐すわつて、主婦あるじは炭すみをおこしに懸かる。

「まつたくさ、お前まい、もの好すきだつていへばそんなものさね。お茶人ちやじんだなんていはれると、むかうへ氣きの毒どくだから何なんだけれど、眞個ほんたうなんだよ。」お欽きんは帶おびの間あひだから女持をんなもちの煙草たばこ入いれを出だして、長煙管ながぎせるを取上とりあげると、昔むかしのおいらんは姉あねさん被かぶりをして燧火マツチをすつて一服吸いっぶくすはしたあとを消炭けしずみにおツつけて、細ほそい呼吸いきでふう／＼と吹ふきつけながら、

「あゝさう。」とばかり受うけては、ちよい／＼指ゆびのさきで眼脂めやにを拭ふいて居ある。

「眞個ほんたうなんだよ、まつたくさ、お前まい、誰だれがはじめから惚ほれるもんかね、深切しんせつだとか、可いい男をとこだとか、狭いきだとか、何なんだとかいふのが戀こひしくなるはじめだとかいふけれど、私わたしのは些少ちつともさうぢやあない。ねえ、お前まい、私わたしあこんなこといつちやあ何なんだけれど、まあ何なにさ、お互たがいに情人いろのないのは、つまり此方こつちから惚ほれてやらないばかりで、前方さきさま様で何なんとか思おもつてくれないわけぢやあないのでせう。ねえ、お前まい。」

「まあ、さう思つてりや間違はなからうよ。」

と火鉢へ顔を突込むやうにして吹きながら、おいらんは眼の下を赤く、あかるくしていつた。がふつと噴出したもんだから、バツと灰が立つたので、お欽は掌で姉さんかぶりへ埃のかゝつたのを拂いてやり、

「其上に何だわ、私あ女同士ぢやあ随分思ふやうにならないこともあるし、お前のやうに上手なものもあるんだから、女にや立派なものがあつて、迎も叶はないと思ふのもあるけれど、男といふものは意氣地のない、でれ／＼した、張合のない、甘いもので、鞍に乗つて、返つたからつて、馬車に乗つて、頤を突出して居たからつて、詰らない。何だつて男同士があんなものに恐れ入つて、ぺた／＼お辭儀なんかしてるんだらうと、私の眼からは不思議だつた位だもの。」

考へて御覽よ、お前だつてさうだらう。私の母上さんなんぞも男といやあ、からつきし玩弄にし切つ

てたんだ。

だから何でも構やしない、男にものをいつて、此方の思ふ通りにならないといふことはないもんだ、立派なものだ、えらいものだ、男といふものは自由になるもんだとばかり思つてたし、また、ね、其通だつたからね、附文をするのを押し出してやりや泣面で引退るしさ、睨んでやりや拜むぢやあないか。

つひぞ男が少しでも私にさからつたなんてことは覚えてないのに、あの車夫ツたら何うしたといふんだらうね。はじめて荒物屋の前であつた時から、些ともいふことをきゝやあしない。

何ね、わざとすねるといふんぢやあないが男の癖に些少だつて此方の機嫌を取りさうにしないからさ。だからツイ憎らしくなつて、いまにあやまらせてお世辭をつかはせて、氣兼といふものをさしてやらうと思つたのがはじまりだつたがツイ。」

「また聞かせようと思つて。」

と顔をあげて手拭を取つて、兩手でちよいと鬢を
おさへて、其手で亂雑になつてる茶道具をがちや／
＼やる。

お欵は鐵瓶をかけてやつて、

「だつて口惜いんだものお前、それからさ、足を
痛めて仕事を休まなけりやならないといふのを幸に、
毎日のやうに行つちやあ、あゝだかうだつて取つて
おきのお勤をしてやつても、一向憂身を糞しさうに
しないぢやあないか。口惜い、私を何だと思つてる
んだ、生意氣など、をかしなことだけれど、お前だ
から話すがね、まだ負けないか、まだ惚れないかと、
ぶちまけていへばさうさ。さ、う思ひ／＼してから
かつてる内に何ういふもんだらう、ちつとお恥かし
いことさ。」

「おや／＼。」といひながら兩方の眉毛をな
で、袖口を引張つて、あちこち見て、ポンと膝の
處を拂くと、しゃんとした女主人になる。

「ねえ、何うしたといふのだらう。其癖ちつとも高慢がらないで、姉さん何うもとばかりで恐れ入つて世話をさしてくれるんだけれど、些少も自由にやならないが、アリヤ色氣なしなんかねえ。お前さんはあの人を知つておいでだつてちよいと聞いたが、何かい、あんなでもお前舊つとめて居る時に同一二階でゞも見たことがあつて、其で知つてるのかね。」

「いゝえ其はね、私がまだ此方へ來ないさき、天神下に居た頃、ツイ北廓を出た當座で、四丁目のお醫者様に世話になつてる時さ。これでも立とした丸帯が一本おあり遊ばしたと思召せ。」

むかうの紺屋の裏の下宿屋に居た書生さんで、大變弱つて居たのが、小遣に困るといふからね、北廓に居る内は久しく馴染んで來てくれて、私にや小千圓も使つたのだからお前、可哀相にと思つて、其帯を貸したんだよ。

すると何さ、あの車夫さんがね、お前、其時分は田舎から出て来たで、學資も何もないんだツて、其書生さんの部屋に世話になつて居たんだらう。

私も旦那があるし、近所の手前もあるから、些少垢抜のしたやうなのが出入つちやあをかしくないから、いつでもあの信さんが彼方此方使をしてくれたのさ。

其内、書生さんといふのは何處かへ行つちまつたかして影も見せないから、何うしたら、うと思つて、二三度、信さんにあとで出つくはした時に聞いたことがあつたつけが、むかうぢやあ不義理をした催促でもされると思つたんだと見えて、あとで此方へ越して来てから、ちつと經つと何處かの引越の道具を乗せて、この路地口へ来たのが、私が湯から出た顔を見ると、皆打つちやつて遁げてつた、其が信さんなんさ。何も自分が借りたのぢやあなし、氣に懸けることはいらぬのに、まだ坊ちゃんなんだね、ほんとに今時にや珍しい人さ。

其時はじめてあんな稼業をしてる事を見たんだが、
大方學資とかいふんだね、學問をするお金子に困つ
て、それであゝやつてるのだらうと思つてたが、何
うだね、そんな風は見えないかい。」

お欽は軽く頷いて、

「あゝ、さういやそんな風だよ。車を曳かないで
此方がお客様でない時や、時々ぞんざいな言をつか
ふもの。一層活潑で何んなにか可いだらう。」

と莞爾したが故とらしく顔をかくした。

「呆れたもんだ、朝ツばらから。」

「だつて出来やしないんだもの、ねえお前、私あ
振られたんだよ。」

と少し眞顔になる。

「うそをいつてら。」

「だから口惜いぢやないかね、こんな、私だつて
そんなことは言ひにくいのをお前、思切つて此間ぶ
つかつたわね、0さ、情ないわ。」

「といよ、まつたく眞面目で鬱ぐやうだから、昔
のおいらんは怪訝な顔をして瞻つて居たが、考へて、

「ふむ、働がないね。だが、あんなのにや何
うかするとやられるもんだよ。一體出来合ふ氣でそ
んな談話をするから間違つてるよ、是非と思つた時
は一ツきれる氣でぶつかるさ。悪く拵へようとする
と何處か蟠があつて、變にこじれつちまはあね。
此方人らだつてお前、北廓に居る時はお客を取るの
に、これが何も小野小町を、ふるひにかけたといふ
んぢやあなしさ、来る奴が、皆五六遍は見合をし
て、男の方から贅をいつて引下る奴だもの、氣が弱
くつて馬鹿にして居られるもんか。そこが何うせ賣
物だから、一切色氣ぬきの平氣で懸るから、男の方
で氣まゝに寝返も出来ないといふもんだね。また此
方だつて、初會に軒なんかかゝれたひにやあ酷く氣
が弱くなるからね、すべて高飛車でゆくことさ。何

でもまた逢はうと思つたらこれッ切お目にや懸りま
せんと斯うさね、分つたらう。」と落ついたもの
で、煙草ものまないで平氣でいふのを、ぢつと聞
て、お欽は俯向いて考へてたが、何を悟り得たか、
顔をあげて、晴々しく莞爾した。同時に膝を立て、
腰をひいて、

「ぢやあ、其氣で歸りませう、のちほど。」と
いつた切、直に立たうとする。

「おや、そして今日は髪を結つちやあくれないの
か。」

「おほ、誰に見せるのさ。」

「澤山だ。」

「ちよいと、直ぐいつて談じて見るから、もう、
クサノ、して堪らないもの。まあ、察しておくれ

よ。」

「酷いねえ。」

「堪忍かんにんしておくれ、さきは小兒こどもだ、はいちやい、」
と、あと手でで格子かうしを閉めしざま、お欽きんは空そらを見てみてフ
イと出る。

疊たぐみ建たて具ぐ附まへ前だ店な賃ちん一い兩つり 二に分ぶの敷しき金ぎんなしで、上あり口ぐち
 が三さん疊で、次つぎの室まが六ろく疊で、押おし入いれが二にツあつて、縁えん側が
 が一い間けん半はん。小ちひさな石せき榴りゅうの樹きが一本いっほん植うわつた、馬ば蘭らんが
 五い葉つはばかり悄しれ伏ふし、ひよろりと立たつて、手て水すい鉢ぼちの
 臺だいの椀もみの丸まる太たを圍かこんで居ある、小こ庭にはがある。そして廁かはや
 の前まへに釣つるした枯かれ葱しのぶ と縁えんの下したの塵ごみ取とりと、も一ひとツ棕し櫛ゆる
 でぐいと緊しめた龜ひ裂ひの入いつた土ど竈かまどと、細こまい事ことをいふ
 やうだけれど、おとしに蜜み柑かんの皮かはが一ひとつかね。それ
 でも火ひ鉢ぼちにくべようもんならインフルエンザ第一だいい期つき
 位くらゐの禁まじ厭ひにはなる、これだけが役やく徳とくで先せん代だいの何なに某がしが
 置おき下くだされの唯たゞ貰もらひ。但たゞし縁へりなしの赤あか疊だみで下した塗ぬりばか
 りのぶつけ壁かべ、鏝こての痕あとが蚯み蚓づばれをして居ある、押おし入いれ
 で蛙かへるが鳴なき兼かねない。あけると黴かびツ臭くさいのに、今いまは
 昔むかし東あづま 新しん聞ぶんといつた繪えい入いり新しん聞ぶんに、月つき柳やなぎ 浮う氣きはの横よこ櫛くし
 と題だいした續つづ物ものの、顔かほの尖とがつた、頭あたまの髪けの不ふ思し議ぎに多おほ
 い、手ての指ゆびばかり仰あ山やまなのに、魚う串くしのやうな刀かたなを持もた
 せて、皺しわの少すくない眞ま角かくな衣き物ものを着きせて足あしを出ださした凄すこ
 い女をんなを、松まつの木きに縛しばつて、お月つき様さまの上うへからぶらさげ
 たのを、下したに居ある切きつて居ある處ところを描かいてある、第だい四し

十何回めの挿畫を張出して、一面に壁をはり詰めたのが、煤色になつて、何年以前の驟雨やら、いまだに乾かないで其まゝ濡れて居る、隅の處が鼠の穴へ杉の枯葉を押詰めて塞いである。

たとひこんなでも或意味に於ていへば雨露といふものを凌ぐに足る、新小川町四丁目一番地、車夫信之助の門口へ急いで来て、お欽は身を横にして立停つた。

「今日は、入つても可ござんすか。チヨイと、信さん、何をしてるの。信さん。」

釣をして居た。それ大隱は市にありで、この裏長屋の小汚い搦手が露出になつた、狭い水口に雑巾桶が仰向いて居るやら、蚯蚓のくつついた盥が乾してあるやら、濕つた拭巾をかけた飯櫃に恐しく光る眞鍮の環が見えるやら、お隣には式ばかりの袖垣をして、飛んでもない碧梧桐が植つて居たり、はなれ／＼になつた管簾の蔭に、頭ばかり、並んで晝寐をして居る女が見えたり、砲兵工廠へ洋服を着て出勤す

る男がある^{おにい}と見えて^み、うつくしく洗^{あら}ひ晒^{さら}したシャツ
が三枚^{さんまい}ばかり干^ほ棹^{せう}にかけてある處^{ところ}やら、すべてがら
くたで取^{とり}まはしたなかに、唯^{ただ}一軒^{いつけん}、葉柳^{はやなぎ}が茂^{しげ}つて、
藤棚^{ふぢだな}が遙^{はるか}に見^みえる縁側^{えんがは}の奥^{おく}深い大屋^{おほや}の庭^{には}だけを姿^{すがた}に
した、十五坪^{じゅうごへい}ばかりの池^{いけ}がある。蕎麥^{そば}の花^{はな}を雀^{むし}つた
やうな水草^{みづくさ}が一面^{いちめん}になつて沈^{ちん}澱^{でん}して居^ゐるのに、其大^{そのおほ}
屋^やの庭前^{には}ばかりは鏡^{かみ}をはめたやうに、水^{みづ}がきれいいで、
あとは黒^{くろ}く濁^{にご}つて居^ゐる。これへ紺屋^{こつや}の藍^{あゐ}が流^{なが}れ込^こむ、
下水^{げすみ}が入^{はい}る、茶殻^{ちやがら}が交^{まじ}る、磨^{とぎ}汁^{じゅう}がそぐといふもの
で、何^{なん}の事^{こと}はない五^ご色^{しき}の池^{いけ}だ。

其片側^{そのかたがは}の縁^{えん}の前^{まへ}に、一本^{いっほん}小^{ちひ}さな女^め松^{まつ}があつて、赤^{あか}
地に影^{かげ}のさして居^ゐる下に、信^{しん}之^の助^{すけ}は踞^{つくば}つて、のんきに
綸^{いと}を垂^たれて居^ゐたが、何^{なに}が釣^つれますかといふと、鱈^{たら}な
んで。偶^{たま}には三寸^{さんすん}の鮒^{ふな}を捕^{ほく}獲^{わく}し得^うることもあるさう
だけれど、大方^{おほかた}は蛙^{かへる}どのに餌^えをやられてしまふ。

いま、びり／＼といぶりをくれて、ぐツと綸^{いと}をひ
くから大^{だい}事^じの場合^{ばあひ}、お客^{きやく}様^{さま}には返^{へん}事^じもしないで、素^{すば}
早^やく手^{たぐり}繰^こ込んで棹^{させ}をあげると、こんな奴^{やつ}が口^{くち}をあ
いた、蛙^{かへる}どのが餌^えをさらつて、どぶん！

しばらくの間だつたに恐しく懇意になつたもので、お欽は来た方をふりかへつて、大抵は稼に出ていま留守の、日中森とした長屋中をずらつと■し、チヨイと鬢を撫でながら莞爾して戸をあけ、少し腰をかゞめた姿で入る。と、ほこりだらけの上 框 へ、明い影が、ぱつとさした。お欽は立つたまゝで奥を見込み、

「さあ、また大變に散かしたよ、まあ、」

といつた切呆れて見て居る。六疊一室の片隅には、床が取りツ放しで枕が疊へ迂り落ちて、搔卷は蹈脱いだまゝ裏が返つて丸くなつて居る。此方には八寸の膳の上へ何處の安仕出から持込んだものか、二ツ重ねた蓋茶碗が置いてあるが、何も割籠を取つて食ふ位なら、よせば可いに、俎 を持出して大根おろしをなすつたさうで、わさびおろしも其まゝで片着けず、湯呑茶碗やら、土瓶やら、ごつた交で、古道具屋が見切ものを扱ふといふ體だ。

「しやうのないことね、入れやしないよ。」

と眉を寄せるのを、件の床の上へ横になつたまゝ
仰いで見た、信之助。

「跨いで入るさ、造作はない。」

「だつてお前さん。」

「構ふもんか、跨ぐさ／＼。」と澄したもので、
けふはよツぽど元氣が可いが、いつか釘で突いたの
に熱をもつて險難・・・破傷風にならないばか
りで煩つてたから、五分刈がのびて、鬚がまるで苔
のやうだ。

「ほんとにお前さんたらないよ。」とお欽は叱
言をいふやうな、じれるやうなことを言ひながら、
がらくたを手で押遣つて、やう／＼火鉢の前に座を
占めた。こゝでまた帯の間から煙草入を抜きかけた
が、なたまめの煙管を遙に見て、

「また詰つて居るんだらうね。」

「いゝえ。」と寝たまゝで拾つて出した。

「感心だ。」

「何ね、口がまづいから些少も喫まないもの。」

「ぢやあ熱があるせゐでせう。」

「まだ、何うも。」と額をおさへる。

「さうさ、そして澤山わがまゝをなさいまし。人があれほどいつて置くのにそは／＼して、誰が日中この暑いのに蛙を釣るてことはありますか。」

「だつて、退屈でしやうがないもの。」

「贅澤なことをおいひでないよ。」

「それだつたつて、醫師が。」

「お医者様が何と申しました。」

「もう構はないツて申しました。」

「さうですか。」といつた切で、ツンとして横を向いて煙草をつめる。信之助はぐツと此方へ寝返つて、

「怒つたね。」

お欽は知らぬ顔で煙草をのまうとして、火鉢の中を覗いたが、

「あれ、信さん、お前、此中で蚊燻をしちやあいけないツてのに、火鉢の中が眞黒になつちまつたよ、ほんとうに、」

「構ふもんかね。」

「構はないツてお前、こりやお客様があつた時出さないぢやあ、しやうがないね。」

信之助は悟つたやうな言葉ツつきで、

「お客つてお前より他にやありやしないもの。」

「さうね、」 といった、お欽は振返つて莞爾した。

「どれ、其氣で一服頂かう、おや、まあ、火の氣も何もありません。」

「燧火があります、燧火。」

「飛んだお客様扱なこと。まつちぢやあ不味いもの。」

「それぢやあ拵へるさ。」

「ついでにお湯も沸すのかね、たきつけはないのか不知。」 と其處らを見廻す。 信之助はじれつたさうに、

「石炭をぶつかけるさ。」

「驚いた。」

と尋常（じんじやう）にいつては見たが、この姉（ねえ）さんもあんまり其様（そんな）こと遣（や）りかねない質（たち）だから、手取（てとり）早（はや）して油壺（あぶらひ）を取上（とりあ）げて新聞（しんぶん）の切（き）で押（お）へて、倒（かさ）まにしてふつて見たが、一滴（ひとしずく）もない。

「ちつともありやしないよ、まるでからだわ。」

「いまに油屋（あぶらや）が来るから可（い）いやね、洋燈（ランブ）から口移（くちうつし）とやツつけなさい。」

と信之助（しんのすけ）は心得（こころえ）たもので。

そこでお欽（きん）の丹精（たんせい）で、不（ふ）作（さ）法（は）におきが出来（でき）た。立（た）て續（つ）に二三服（ふくす）吸（す）つて、

「さあ、」と吸口（すひくち）を出（だ）すと、信之助（しんのすけ）は頭（かぶり）をふつて、

「欲かあないよ。」

「そんなこといはないで、さあ／＼、のまないかよ。」
「無暗と唇へおツつけると澁面を造つた、
信之助、

「實に亂暴だ、亂暴だ。」

といひながら、一口試みると、意外にうまかつたので、含ましてもらつた煙管をくはへたまゝ放さない。

「不味ござんすか。」

黙つて居る。

「まだ、熟があつていけないの。」
黙つて居る。お欵はじれ込んで、手を添へて居た煙管を突いて、

「何うだつてばさ。」

信之助莞爾として、

「もう一服。」

「呆れたもんだよ。」

「はゝゝゝゝ。」

信之助は寢返をしてはらばひになつて、枕許へ手を伸して、件のなたまめを火鉢の縁で叩いたけれど、吸ひつめたのでチヨイと落ちない。吸殻の窪んだのを、お欽はつつと寄つて身體を九九の字なりに肱をつきながら、銀簪を抜いて取つて、吸殻をほじつてやり、黙つて煙草をつめかへると、黙つて吸ひつけるのを、黙つて見て、其筭を其まゝ鬢を搔いて居たが、ぴつたり背へ抱きついて顔を覗いた。

「信さん、これがあの清川のお嬢さんなら何うします。」

しばらくすると信之助、ちと口籠つたといふ調子で、

「うむ。」

「うむぢやアありませんよ、信さんたらお前、ちつとは察してくれたツて可いぢやあないか、私がこんなに思つてるものを、さ。」

「そりや姉弟といふんぢやなし、何の縁引もないものを、」

とまじめになつた。

「實に口にやいひ切れない世話になつて、今度なんざ全くお蔭で命拾ひをしたのだから、そりや難有く思はなくツて。何うにかしてこの恩返しをせにやならないと思つてるし、ほんとうだ、いゝえ、かういつちや自分ながら意氣地のない話だけれど、ほんとうにお前ン處を拜んで居るよ。」

「あれ、何だね、誰も恩に被せやしないものを。」

「お前さんが被せなくつたつて、私が被るさ。」

「そんなことをいつちやあ嫌だといふのに。」

「だつて何、自分勝手に、恩に被るんだから可いぢやあないか。勝手に被さして下さい、かまつちやあいけません。」

「おや、むづかしいことをお言ひだねえ、それぢやあお前、私が何かいへば恩に被せるやうにしちまつて、口を利かせまいといふもんだわ。そんなもんぢやあゝるまいと思ひます。」

「ぢやあ何、うすれば可いのだらう。」

「だからさ、」と少しいひ淀む。

「解わかつてます、分わかつてるがね、まあ、あとで何なんだ、自うぬぼ惚れなといはれても可いい、お前まいさんのいふのをほんとうとして置おいて、だつて困こまるぢやあないか。何なんだつて私わたし見たやうな、こんなものに、そんなことをいふんだか。さうした處ところで、芝居しばゐは見みせられずさ、衣きも服のは着きせられずさ。」

「そんなことは知しれてらあね。いまさしあたつて、何なにも。」

「いゝえ、行ゆく末すゑだ、あとのこつた。ありやうにいへば私わたしだつて、何なにも一いっ生しやう車くるま夫まやをして終をはらうとも思おもはないけれど、一いっ體たいのぞみが望のぞみだから、大おほ財が産ねもちになれようとおも思おもはないし、また馬ばし車やに乗のつてあるけさうもないんだから。」

「またあんなことをいふよ、誰だれが馬ばし車やにのりたいたいといひました。」

「それだつて、何なにかのぞみがなくつて私わたし見たやうな者ものの處ところへ。」

「いゝえ、猿が木登をするんぢやあるまいし、目星も何もつけるものかね、お前人情といふものは、そんなもんぢやあないよ。」

「しかし困るもの。」

「だから私が働くといふのにさ。」

「女房に働かしてたまるものか。」

「それぢやあ働きませんさ。」

「だつて、芝居つてわけにや行かず。」

「また芝居がはじまつたよ。よくお前さんは芝居々々つていふが、何ですか、人は芝居を見ようために女房になるもの……ですか。」

「まあ遊山もせにやあならず、女といふものは好きなものだ。」と頗るにぶい論法で信之助はとちりながら雲をつかむやうなことをいふ。

「馬鹿におしでないよ。」 お欽は少し腹立顔で、

「それぢやあ清川のお嬢さんなら芝居を見せないでも可いんですか。」

信之助は口をうごかしたが、ものを言はなかつた。

「そして衣服をきせないでも可いんですか。」

黙つて俯向いた。

「よ、馬車にのらなくつても、藏を立てなくつても可いんですが、よ、信さん。」

といつて、起直つて座を正して、

「それぢやあ餘まり不實だわねえ。」

信之助は返事が出来ないのである。お欽は此以前に妾にでもといつたけれど、實際夫婦のやうな

關係のある種類のものには、たとひ何といふ名をつ
けようと、信之助は肯ずることを得ないので、他
に意中の人があるので、お欽を容れる餘地がないの
であつた。

信之助はいまうつむいたまゝ枕にぴつたりと額を
あてゝ、身動きもしないで居たがい溜いきをして、

「困〔こま〕るなあ。」と切なさうに幽にいつ
た。お欽はぶる／＼と震へたが、背に乗せて居た手
を引いて、膝にのせて、ぢつと考へ込んだ。鋭い、
清い眼に何うやらほりとしたやうだつた。

門口で、魚屋が鎌倉を活して出たといふかけ聲で、

「今日は、」

「あゝ、何があるえ。」

といふを機會に、お欽はくづぼれて居た身を起し
て出た。

「えゝ、鮪まぐろに鰈かれひ、鯛たひに鰯ぼら！ 小鰹こあぢか、鯖さば、ますに、はう／＼、はんぺんに蒲鉾かまぼこ、」と、節ふしを附つけて言いつたまゝけるりとして居ゐる。お欽きんは盤臺はんだいを覗のぞきなから、格子かうし 戸とに片手かたてをかけて、

「酷ひどくならべますね、むゝ新あたらししさうだ、その鮪まぐろをつくツてね、鰹あぢを十ばかり鹽しほ焼やきにするんだから、それからと、まあ可いいや。あのね、お前まい、そして御苦ごくら勞うだが、角かどの島屋しまやへいつて、極ごく良いい處ところを五合ごんがふばかりと、さいういつておくれな大急おほいそぎだよ。可いいかい。」

「えゝ可ようござす。」

といひながら駈かけ出して井戸端いどばたへ行ゆく。信之助しんのすけは何なんと思おもつたかむく／＼と半なかば身みを起おこして、

「お欽きんさん、何どうするんだ、何なんのお祝いはひだ。」
と呆あきれるのを、あがり框かまちの薄暗うすぐらいなかに立たつたまゝ、白しろい顔かほを見みせてふりかへつて、微笑ゑみを含ふくんだ。

お 欽^{きん}、

「 信^{しん}さん、

別^{わか}れませう、

別^{わか}れ

の 杯^さ ^{かつ} ^き

を しませう。

」

おほや 大屋さんの葉柳と葡萄棚に虹がさして池の面には
 あは 薄墨で蔭が懸つた、庭へは水をうつたから、し
 んみりして軒の葱のからひたのも露をもつて活々す
 る。屋根から時々雫が落ちる。一室はお欵の丹精で
 すみ／＼さうぢ 隅々掃除が行届いて赤畳だけどほこりもなく、が
 らくたも綺麗に片づく、信之助の家には何にもな
 い。縁先に膳を置いて、さしむかひで二人、お欵は
 とくり 徳利を持つて、信之助は 杯 をあげた。が、やゝ
 しゆんじゆん 逡巡した様子である。

「お前、何か、別離の杯 だと言つたが、何う
 いふ譯なの。」

「何ね、夫婦別離の杯 をしようといふのさ。
 わたし 私がつい此間から變な言を謂出して、お前さんも氣
 が悪からうし、私も何だか氣になるから、これをね、
 わかれ 別離の 杯 にしようと言ふの。而して夫婦なんざ
 とりけ 取消しだよ。」

と澄^{すま}していった。信之助^{しんのすけ}もまた自若^{じじゃく}として、

「むゝ、左様^{さよう}、そりや何^{なに}より結構^{けっこう}だ。ぢやあ飲^のま
う、酌^ついでおぐんな。」

無雑作^{むざふさ}に杯^{さかづき}を差出^{さした}したが、お欽^{きん}は爛徳利^{かんどくり}を傾^{かたむ}
けながら少^{すこ}し言淀^{いひよど}んで、

「あの、お前^{まい}さん。」

「え、何^{なに}。」

「斯^かう言^いつちやあ未練^{みれん}のやうで、お前^{まい}さんにはお
恥^{はづ}かしいが、私^{わたし}は未^まだ斷念^{あきら}められないよ。」

と口籠^{くちごも}つて顔^{かほ}を赧^{あか}うする。信之助^{しんのすけ}は瞻^{みまも}つた眼^めに、
疑^がの色^{いろ}を宿^{やど}して、
うた

「何^{なぜ}故^げ。」

「何^{なぜ}故^げでもさ、だからねお前^{まい}さん、後生^{ごしやう}だから、

もう一遍あの件を聞かして頂戴な、念のため、もう一度聞きたいよ。」

と言ふ聲が少しく震へて居る。お欽は思はくが違つたらう。信之助は其意を得ないで、

「あのことツて、何？」

「あら私をお前さんが女房に出来ないつていふ譯さ。」と俯向いた。

信之助は額を撫で、

「ふむ、可いぢやあ無いか、分つてる。」

「だけれども。」

信之助も首だれて、

「困つちまふ喃、何うも、改まつちや言悪いも

の。」

「可いぢやアありませんか、誰も聞いてゐやしな
いから。」

「だつてお前が聞いてゐるから。」

お欽は淋しい笑をした。

「そんなこと言はないでさ、何の、男の様でも無
い。」

「むゝぢやあ言はう、お前を嫌ふといふ譯ぢやあ
無いが、他に其、私が少し．．．．．まあ可いぢや
あ無いか分つてる癖に。」

「だつてもさ。」

「困るなあ、何うも。私が其他少し、思つてる、
女があつて．．．．．まあ可いぢやあ無いか、分つ
てる癖に。」

と困こづずる顔かほ。お欽きんはしだいに曇くもらした眼めに屹きつと見みて、

「眞ほん個ごかい。」

信しん之の助すけもあらたまつて、

「むゝ眞ほん個ごだ。」

恚かして二人ふたりとも無む言ごんになつたが、少しば時らくして、

「何なにも許い嫁なづけといふんぢやあ無なし、約やく束そくをしたといふでもなし、むかうの女をんなは私わたしといふものを知しつてるか、知しらないか、それさへ分わからない位くらいだけれど、何どういふもんだか、大おほ方かた因いん業ごふといふんだ。お前まへの深しん切せつは私わたしが知しつてる。こんな意い氣き地ぢの無ないものでも、何時いつか思おん返がへしをする時ときもあらうから、まあ長ながい眼めで見みて居ゐてくれ。」

と信しん之の助すけはつく／＼思おも入ひいつた體ていである。お欽きんは顔かほをあ上あげて、

「何の、つまらない、恩もなにもあるんぢやあな
いわね。可いよ、分りました。しかしね、私はこれ
で少時来ないよ。今日も宅から出る時は、立派に笑
つてと思つたけれど、顔を見るとまた未練が出るか
らね、何うせ末長く一緒に遊んぢや欲しいけれど、
夫婦になりたいといふ心がなくなるまで、私はね、
行をする氣で、お前さんに會はないよ。此間話し
た紺の單衣ね、ありやお前さんに、綻も縫へな
いやうではと思つて、雑巾から稽古をし出して、手
初に縫つて見たが、ね、よくはならないけれど出来
ると持して寄越すから、しつけを取つて着ておくれ。
而してね、信さん、勉強は嬉しいが、毒だといふか
ら夜更をおしでないよ、大變身體が弱るツさ。」
とお欽は俯向いてる男の顔を、こんどは優しい眼
でソツと見た。

信之助は腕を拱いて、

「それぢやあ多日來ないつもりか、私も淋しいが仕方がない。」

「唯、私だつて來ないぢやあ居られないけれど、顔を見ると直ぐ未練が出るから、まあ何だか知らんが辛抱をして見ようと思ふよ。だがね、來たくツて我慢が出來なけりやあ、また何時でも話に來るわ。」

「そりや可いさ。」

此處で、お欽は改まつて、

「それでは思切るから、さあおあがり、一杯注ぐよ。」

と少し震へながら酌したのを、信之助はぐつと干して、

「ぢやあ思切つてくれ。一ツあげよう。」

と杯を取つて、充溢と注いで貰ひ、掌に据ゑて唇にあてる時、前の世の因縁でもあつたんだらう、お欽がはら／＼と落涙して、

「笑つておくれでないよ。」

と横を向いて、ソツと眼を拭つて、やがて顔を振上げたが、酔つたんぢやなくなつて瞼が赤く、稍蒼くなつた満面にあはれなる笑を湛へて居る。座はしらけてしまつた、處へ、恰も可しで、

「もし、一寸伺ひます。」

あい、誰方。」

「私のはあの、清川から参りましたものでございませが。」と格子戸を開けて、初が赭ら顔をずつと出し、お欽を見附けると突拍子で、

「あら、髪結さん、今ね、あんたのお宅へ伺ひましたが、此方にお出だと聞いて参りました。お忙が

しうございませうが、何卒どうぞ今日けふ中ちゆうにお嬢様ぢやうさまのお髪くしを
一ツひと、片蔭かたかげになつてからで可ようございますからね、
是非ぜひと斯様かやうにおつしやりました。」

お欽きんは機嫌きげんよく承知しやうちをして、

「唯あい、直すくに参まゐります。」

「それでは何卒どうぞ。」

「憚はな様かりさま。」

「左様ひだりさまなら。」

これで信之助しんのすけは何時いつかの車夫しやふだといふことに氣きがつ
かうもんなら急きふに歸かへるのではなかつたに。後あとで信之しんのす
助けは淋さみしさうに、

「それではもう歸かへるの。」

お欽きんは縷子しゆすの帶おびをぎうと撫なで、

「他^{ほか}なら、断^{ことわ}つちまふけれど、清川^{きよかは}のお嬢^{ぢやうさん}様だと
いふから、念^{ねんいり}入^{いり}で結^ゆつて上^あげるんだよ、信^{しん}さん、島^{しま}
田^だが可^よからうね。」

「え！」

「あばよ、お奢^{おご}んな。」と言^{いひ}かけて、手^て酌^{しゃく}で大^{おほ}
きなのにぐいと引^{ひっか}懸^かけ、威^{いせ}勢^{せい}よく座^ざを立^たつ時^{とき}、投^{なげ}出^だ
したやうに、

「つまらない、な。」

「奥様いけません、全くいけませんさうでござい
ますからお止めになりました方が宜しうございま
す。」

何時なら門口で、用を聞いて歸るのだけど、今日
はちと仔細あつて、庭口から縁前へ招かれた、傳通
院前の鶏卵屋で、鰹節、海苔などを商ふ山下屋の
小僧で、佐吉といふ、中年の實體者で、前掛をだら
しなく長くして居る。聲が出ますからものをいひま
すといつたやうな、無愛想だが八キ／＼分るやうに
至極丁寧にものをいふ男で。

清子は正面に坐つて、お欵に髪を結はして居る。
母親は簀戸に背を凭たして、中腰になつて團扇を垂
れて、足を隠しながら髪を結ふお欵の手許と、もの
をいふ小僧の顔とを等分に見て聞いて居た。

「ちよいと見當らないのかい。」

「いゝえ、それはございますとも。手前ども芝口に支店がございました、矢張かやうに方々ご用を承つてをりますので、一日にいたしてはさほどもございませんが、まはり／＼にこれが一週間になりますと五千軒の上でございますので、彼處此處探させました。何にいたしましても、成たけ離れた方が可いとおつしやることでございますから其つもりで聞合せましたが、露月町に一軒、これはまだ人が住つて居りまして、來月明くのなさうでございます。西の久保櫻川町に一軒これは二階屋で、至極間積が宜しうございますさうで、湯殿がついてをります。其わきがお化粧部屋で、こゝは到つて汚くなつて、紅やら白粉やらが其こぼれてをりますが、此處は直様疊を入替へますさうで、直段もお恰好なり、勿論空家でございますから、何時入らつしやいましても宜しいので、まだずつと伊皿子の方へ寄りました處にも一軒。それから下谷仲御徒町に一軒、しかし何でございます、直湯屋の隣だと申すことで、これはいけますまい。本郷の新花町アノ俗に大根畑と申しますな、其處のは玄關構で庭も廣いさうでございますが、お直段は至極お安うございます。何でも近

所ぢやあ兎の亡靈が出る^でと申^まします。其^{それ}が其何^{そのなん}ださうでございますな、舊^{もと}其家^{そのいへ}に住^すんでをりましたのが、可^かなり物持^{ものもち}であつたさうですが、一^{ひと}さかり兎^{うさぎ}が流行^{はやり}まして、ものに依^よりましては大^{たい}そうな直^ねがいたしましたさうで。とんと其^{それ}にはまりましてな、其^{その}ために身代^{しんだい}をすつてしまつたと申^まします。で段々^{だん／＼}零落^{れいらく}しまして、食^くふや食^くはずになりましたので、夫婦^{ふうふ}が内^{うち}をあけて何處^{どこ}へか出^でてをりましたあとで、極暑^{ごくあつ}い時^{とき}でございましたさうで、まだ其時^{そのじぶん}分^{ぶん}まで持^もつてをりました、兎^{うさぎ}が番^{つがひ}、それにあなた、自分^{じぶん}達^{たち}が食^くふや食^くはずでございますから、ツイそれ、きらず一^{ひと}掴^{つか}もあてがはないで置^あいたでございませう、堪^{たま}りません。

空^{そら}を見^みしても眼^めがくらみますやうな、丁度^{ちやうど}いま時^{じぶん}分^{ぶん}だと申^ましますから、この炎^{えん}天^{てん}で干^ひ殺^{ころ}にされましては堪^{たま}りませんな、とう／＼番^{つがひ}とも、庭^{には}の荒^あれまして其^{その}草^{くさ}いきれのなかへ倒^{たふ}れてしまひまして、身^{からだ}體^たの皮^{かは}が日^ひ數^{かず}經^たつてべる／＼に剥^むけて、腸^{はらわた}や何^{なに}かゞ、其^{その}處^こら中^{ちゆう}へなすりつけたやうになつて、ハヤもう、黒^{くろ}かたまりになつてたと申^まします。この念^{ねん}が、残^{のこ}りましたのださうで、

「あれ！ 嫌いやなねえ、母おつかさん様。」 と、清きよこ子は何どうしたんか、身み震ふるをして、さうして顔かほの色いろをかへたので、母はやおや親おやはいそがはしく喙くちを容いれた。

「まあ、そんな家うちはお前まへ。」

佐さ吉きちはぬからない顔かほで、

「いや、もう其それは、手前てまへどもでも存ぞんじて居をります。

とても思おぼ召しめしにはかなひますまい！」

「お新發意此處ぢや、」
 と笠の下から汗を浴びた顔をあげて、極熱のため
 に赤くなつた眼で連の大學生を見たのは老農
 で・・・・雑司ヶ谷から一町ばかり東へ隔つた畑
 中の荒寺の前で然ういつた。

寺には山號を署した扁額も残つて居ない。門ばかり
 塀のやうに野中に立つて、傾きながら残つて居る
 が、ぴつたり扉を鎖したまゝで、門柱の右左に此春
 立てたらしい門松の、形ばかりなのが赤くなつて枯
 れて、未だに倒れないで其まゝになつて居て。向ふ
 と左の潛門は扉が倒れて開いて居る。門際で逡巡を
 して、

「お前様がついてござらつしやるし、たかゞ白晝
 のこんだ、老人の癖に何もはい、恐いことはご
 ざんないが、私ハアもうこれで御免蒙りますべい。

何たらアノ氣の毒な様子に見られたことではござ

りましねえ。私等がやうな嬰兒の中から、炎天や、寒中裸で鍛へて、鐵石のやうになつてる身體でもない、この二三日の暑さぢやあ何ともハヤすべこたあござらないに、お新發意、今日で三日になりますぢや。

第一ものは食はず、私らが知つて居りますのぢや水一滴も飲まねえので、この暑いのに、草中へ坐つてござるが、切ツ端一個天窓を隠して、日の目を除けようぢやねえ。其上不斷から病身ぢやに、苧殻の生々しいやうな細い身體で、あの總領殿は何うなります。へい、留めてくれるな、邪魔をするな、佛信者ぢや、行をするのぢや、文覺上人の瀧の荒行も同一ぢや。お前様方も信心は知つて居るぢや、といふじとぢやで。あゝ、御嶽の行者は火の中をば跣足で歩行くに、斷食の日向ぼつこはないこつてもあるまいと、行ぢやと思へば皆も無理には邪魔をせず。巡査にも秘して居りますが、ハヤ二目とは見られましねえ。一寸見ても呼吸が詰る。案じられてなりませぬで、お新發意、お前さま大學校の學者ぢやけに、お頼み申しますわ。幼馴染の朋達ぢや。あゝ

して置いて可いものか悪いものか、あんべいしきやう見届けてくれさつせえ。」

關堂寺探了は靜に頷いた、が眉は顰んで居た。

「ぢやあ爺さん、お前さんは歸るが可い。」

「何分、」と腰を屈めて、また笠の下から朱のやうな顔で眼を光らして學生を見たが、流れ落つる汗を手の甲で拂ひ／＼、とぼ／＼と歸つて行く。

探了は其まゝ潜門の前に立つて、蝙蝠傘で日を除けながら、何か考へてしばらくのあひだ立つて居たが、

「む、」と思ひ出したやうにつか／＼と跨いで入つた。

門内の土は高低にぬかつたまゝ乾いて居る。寺のあとゝ思ふものは、庖厨も本堂も何もなく、纒に厨子堂と思はるゝ三尊の座の空いたのが、落ちかゝつた縁の上に明るくなつて、壁の落ちた處へ縦横に亂

麻の如き蜘蛛の巣が白く見える。

探了はチヨイと腰を屈めて禮拜をして、彼處此處
ニすと、この縁のうしろの方に倒れかゝつた、塔婆
のさが五六本見えたので、墓原だらう、其處に、
とさう思つてつか／＼後へまはる。空谷の跽音！
靴音がこの荒寺の午の時さがり、森としたなかへ響
くや否や、「あれツ」といふ魂消る聲で、縁の
下から鞠のやうになつて飛びあがつたものがある。
此方も不意だから驚いて見ると、蝙蝠傘をはふり出
して、跣足になつた銀杏返の二十ばかりの婦だから、
何だと思つて試に呼んだ。

「もし、もし、何うなすつた。姉さん、」

婦人はやう／＼門の際で此方を向いて、**■**つた眼で、足の爪さきから天窓の上まで、じろ／＼探了を見て居たが、徽章のついた制帽を被つてたので、安心をしたと見える。

「はい、あゝ、吃驚した、吃驚しましたよ。私は何ういたさう。」と苦笑をして――歩進み寄つた。探了も前へ出で、

「其は失禮、何を驚いたんです。」

「何だつて、あなた、私は主人から頼まれて、少し様子を見に来たんでございますがね、此方見て居るといふことを向うへ知らせますまいと思つて、もう／＼いきをのんでをりました處へ、いきなりあなたがおいで遊ばしたもんですから、見られちゃあならない、隠れて居ると思ひますので、ほんとに掴みかゝられさうで吃驚いたしましたのでございます。」

探了は温顔に笑を含み、

「いや、それは何うも、飛んだ處へ参り合せました。そして何ですか、何を見て在つしやつた。」

「それがでございますわ。あなた、内のお嬢様へあてつけの荒行だつて、恐しい、野原の中に断食をして居るのでございますよ。人、ほんとうに、」といきまいていふ。探了は胸にあたつたので、眼を働かした。

「お前さんは何處です。」

「はあ、大塚のあなた、清川といふお邸に居りますものでございます。」

「左様かね、何だか断食だのなんのつて大變なお話だが、何うしたわけです。よく聞かしてくれませんか。」

思ふ處あつて聞かうとした。初は何うせ隙なんで、

對手欲やだから直ぐ言葉尻に飛着いて、

「えゝ／＼些少も構ひません、ほんとにこんな無理な奴が世の中にあるものでございますか。まあお聞きなさいまし。」

「なるほど、いや、かう立つて居ては堪りません、些少此處へお懸けなさい。」

「左様ですね、」

二人は縁へ腰を懸けた。探了は蝙蝠傘を疊んで、傍へ置いて、制帽を脱いで、其上に乗せて、手拭で額の汗をふいて、二つ三つ手で風を入れた。この帽子を脱ぐと、探了の真相、本地といふものが、印象明瞭になつて人目に映るので、一體、大學で同窓の友も皆さういつて居る、關堂寺探了は天窓で學問をするのださうだ。

天窓で學問をするといつても、敢て脳髓で學ぶといふ意味ではない。此人生れつき恐しい胎毒で、髪

といつたら幼少の頃から少しもない、生際を白く糸
どつて、すつぺりと兀げて、優曇華のやうなたとへ
ば硝子の針のやうな毛が一面に生えては居るが、透
明體だといつて宜しい、一筋毎に日光を透すから、
有るか無いか日向なんぞで些少でも分るものはない。
かういふのは母親の胎内から、十戒を授かつて出家
になり濟して生れたので、濱に野毛山といふのはあ
るが、人に兀山といはれるのはこの男である。

だから詰り或意味に於ての、世の中を棄て、發心
して、そして學問をしようと思ひたつたので、哲學
科で、刻苦精勵日もなほ足らずといふ勉強家であ
るのは全くこの天窓ゆゑであらうといふ。顔は丸顔
で、血色の好い、てら／＼した、愛嬌のある、人懐
こい、殊に其眼色の柔しさといつたらない。眉がふ
つさりして眦の方が垂れて居る。唇は厚いがい
つもうるほつて、濡色が赤く見へて、和氣靄々とし
たもので、些少も心の措けた様子のある男でない。
かやうな人物に對すると、女といふものは些少も恥
らはないことになつてゐるから、いま其天窓を見てか
らといふものは、清川の女中初の如きも、見得も嬌

羞なもなしに平へい然ぜんまた自じ若やくとして物もの語がる。

「其執念深いのは、はじめから知れてるのでございますわ。世の中にしつこいものといつたら、蛇と、鮎と、蝙蝠と、蝦蟆と言ふぢやありませんか。あれとね、なまぐさ坊主とね、それから、今ぢや肺病患者で、癆がい病がしつこいのだつてこつてすが、眞實でございますよ。」

業病でね、からだは段々、薄い影法師のやうに消えて行つても、死ぬ時まであなた、色氣と、食氣がへるわけのものぢやありません。病氣がおもるほど、日ましにしつこくなるんですツて、嫌ですわねえ。

ツイ先頃、いつも築土前から、内へ参ります髪結のね、お欽さんといふのが、晩方でしたさうで、宅へ参ります途中、あんまり熱いから、息つきに切支丹坂の氷屋へ寄つたのでございますと。

煤けた障子を二枚、上口の三疊へ押ばづして、た

てかけて、次の六疊に長火鉢を置いて、婆さんが一人、此節は、いつでも大肌脱で團扇を使つて居りますわ。

前に五六本、小さな檜木がございますのに、綱を渡して鬼灯提灯を三ツばかりぶらさげた、下に、黄くなつた赤毛布を敷いた縁臺をね、二ツばかりならべまして、それでも氷屋でございますわ。

お欽さんがさういひました。いゝ水屋ぢやありませんか。長火鉢の上の棚に、ラムネの罫がごた／＼置いてあるので、ございますツて、何だか氷もなまぬるいやうですな。ツイ道ばたゞつたもんですから、あの、其處へ寄つて、休んで居ますとね、モーツの縁臺の隅の方に、疲れ切つた風で腰をかけて居たのが、其資吉ツて古着屋の厄介の、意氣地なしの、業突の、押の利いた、肺病やみで、内のお嬢様を魅込んで居る、色狂氣！

私あいつでもあんなのが未始終は化けるのだツて、さういひ／＼しましたツけが、お邸へつきものでも

したやうに、家の影法師のやうに、附まどつて入浸りになつてたのが、其四五日前からふツつり來なくなりましてね、何でも厄介になつて居る叔父の金子を五圓とか七圓とか盗んで遁げましたツてさ。それから、あの、板橋へ行つて、おいらんを買つて、これだけ遊ばしてくれとかいつて、すツかり其お金子をあなた、あひての女郎に預けたんでございますとね。さうすると顔をも見せないで一晩と半日置いて、もう皆になりましたつて、つき出してしまひましたつてね、當前ですわ。誰があんな奴に。それから何處か安泊へ入り込んで、二日ばかり屋根の下に寝ましたさうですが、合宿の、何でも土方だツていひます、其の股引と脚絆とやらを、大方ひどい、ぼろなんでございませう。何としようと思つたんですか、盗みましたさうですが、何をしたつて、アノ半間ですからねえ、ツイやり損なつて掴まつて、土方ども四五人に袋叩きにされましたさうですが、なぐると血を吐いたので堪忍して、巡査にも渡されないうで放してくれましたツて、それから何處へ行つたか、古着屋へは固より歸られませんか。内へなんざ、固より寄着かれたわけのもんぢやあございせんから、私

なんざ、まあ、厄拂だ、結構だと思つてましたが、
其あとで、何處を何うして居たんですが、お欽
さんが休みました隣の縁臺に、しよんぼり坐つてた
んで、ございますとね。お欽さんは何にも様子を知
らないで居るし、それに内へ來ちや別に話しあつ
たこともございませんが、見知越のなかなんですか
ら、むかうで気がついたら挨拶でもしようと思
つて居ましたさうです。」

「そばに置いてあつた泡雪の硝子杯のなかへ、ばつと蟲が一個たちこんで、また飛んでいつたさうですが、ちよいと見ると毒蟲のやうでしたつて。

肺病やみは、うつむいて居たもんですから、何にも気がつかないで、取つて飲まうとしますから、お欽さんが、

「あれ！」といふので聲をかけて、毒ですから、あかつちやあ大變だつていひましたつて。さうすると手をついてお禮でもいふことか、涎つた口で、

「あゝ、そんなこと知らして下さらなきや可かつた！これを飲めばそんなら死なれましたのに、」
不承面をしましたと。そんなつむじ曲だから憎まれるんです。

それだのお欽さんといふ人は、もの好ぢやありませんか、

「おや、まあ、妙なことをおいひだね、何うしたわけですあなた。」　つて聞きましたつさ。

すつかり身の上ばなしをして、

「何うしても、清川ぢや、私のいふことを肯いてくれません、肯きさうにもいたしません、」

つさ、知れたこつてすわ、あなた。馬鹿々々しい！

「もう私は他に生きて居るわけはないのであります。唯単一希望と申す、其が叶はねば、生きて居ても仕方がないのであります。けれども望が叶はないからというて、首を縊つて死ぬことは出来ません。死なれません。口惜い！　口惜いけれど仕方がないが、仕方がないとは断念めることが出来ないのです、断念められないといつて死ぬことは出来ません。死ぬことはいとほぬけれど、其には其位、私が死ぬくらの報がなければ嫌で、蟲けらだとして生命は欲しがりません。」

とさういひましたつて、其位なら何も好と業で、
途徹もない望なんか起さなきや可いのにねえ。それ
で何ですつて、

「だといつて何ういたした處で其報をうけられさ
うにもなし、報がなければ死ぬのは嫌、嫌といつて
一日なり二日なり、この病で倒れるまで、びく／＼
生きて居ることはとても辛抱が出来ません。一層一
思に誰か殺してゞもくれりや可いが、誰が私のため
に人殺の罪を犯してくれませう。いまも硝子杯の氷
のなかへ、毒蟲が入りましたとやら、知らずに飲め
ばひよつとかして、死なれたでありますに、お注
意で却つて怨めしい。けれども私も生をうけたもの、
曲りなりにも意地はあります、我慢もあります。毒
と知りつゝは何うして／＼飲むことではありません。
この御深切は難有うございます。」

とさういつた時は丁寧に手をついて禮をいひまし
たつて。内へ来てお欽さんが話したんでございます
よ。

そして、話（はな）しましたは話（はな）しましたで、其（それ）で可（い）の
でございますかね、其（その）お欽（きん）さんといふのが何（ど）うした
といふのでせう。

「私（わたし）も覺（おぼえ）があるんです。自（じ）分（ぶん）の思（おも）ふ人（ひと）に嫌（きら）はれた
心持（こころもち）といふものは何（なん）ともいへましたわけのものぢや
あござんせぬ。殊（こと）にあんな情（なさけ）ない！ あすとも知（し）れ
ない病氣（びやうき）の身（み）體（たい）で、今（こん）日（にち）寐（ね）る處（ところ）さへないといふ身（み）に
なつちやあ、まあ何（ど）の位（くらい）な思（おも）いでせう。尤（も）も、そんな
始（しま）末（つ）にいけない人（ひと）でありますだけ、そりや此（こ）方（ち）様（さま）に
は御（ご）相（さ）談（だん）になつたものぢやあござんせぬが、其（その）御（ご）
相（さ）談（だん）にならないだけが、一（いち）倍（ばい）かはいさうで、氣（き）の毒（どく）
ぢやアありませんか。全（ま）くです、何（ど）うにかして其（その）心（こころ）
だけでも汲（く）んでおやんなさいまし。私（わたし）もつく／＼さ
う思（おも）ひました。たとひ何（ど）んな者（もの）でございませうとも、
あれまでに思（おも）つてくれるものを、さう／＼すげなく
取（とり）扱（あつか）ふわけのもんぢやあございませぬ。お嬢（ぢやう）様（さま）もお
聞（き）き遊（あそ）ばせ。」ツてね、ざツくばらんの傳（でん）法（ぽう）肌（はだ）で、
俠（きや）な名（な）代（だい）の髪（かみ）結（ゆひ）ですからね、お嬢（ぢやう）様（さま）を前（まへ）に置（お）いて、
奥（おく）様（さま）の在（い）らつしやるのに、かけかまひなしにやつた
でせう。

私わたしなんざ、おや、この髪結かみゆひは何どうかしたのかと思おもひましたわ。内うちぢやあ、何どうしてあの人ひとが出入でいりをするのが嫌いやさに、何處どこぞ芝しばか、深川ふかゝはか、早稲田わせだの奥おくへでも引越ひっこさうなんて騒さわいで在いらつしやる位くらゐですもの、ねえ、あなた！

其癖そのくせお欽きんさんツたら、眞面目まじめにしんみりしてお話はなしだから、呆あきれたぢやあございませんか。

眞面目まじめにさういふものですから、奥様おくさまも、むつとなすつた位くらいでしたよ。でも何なにもぶちまけた女をんなで、氣き象やうは豫かねて御存ごぞんじなり、惡氣わるきでいつたんどぢやあないのは知しれてますから、其まゝお色いろはとけましたかね、ほんとにお欽きんさんもお欽きんさんですわねえ。」

「其上で、お欽さんのいひますには、　「あゝや
つて此邊をうるついで居るやうぢやあ、また此家へ
参るのは知れて居ますから、蛇の生殺にしてお置き
なさらないで、テキパキ極をつけておやんなすつた
方が可いでございます。しかしあれほどまでに思
ひ込んで居りますから、不可ないたつて、とても承
知するわけのもんぢやあございません。蛇になつて
も着絡ふに違ひませんから何うにかしておやんなさ
いまし。」

とさういつたもんですから、實はお宅でも考に餘
つて相談對手が欲しい處、いゝ幸にお欽さんとはなし
あつて、とう／＼かういふことにしたんですわ。

つまり、私をと資吉がさういつたら、

「はい、其は分りました。それはもうお嫁にやる
なり、お婿に取るなりしませうが、亡くなつた清の
父親が承知をしますか何うですか。其意が分らなけ
れば、女と母親ばかりでは、何とも計らふことが出

来ません、で其しつかりした返事を聞いて下さい。
また此方でも、其返事を聞きましたほど腑に落ちる
ことが、何んなことなりとありましたら、いかにも
承知をいたしませう。」

とかういふことに極めたんですがね。お欽さんの
話なんで、むかし執念深い蛇が餘所の御新造さんに
何うとかして、それが何でも鷺の首を三個といふ約
束をしたとやらで、それでやう／＼遁れましたとか
何とかいふ、私は委しいことは知りませんが、何で
も其と同一術なんださうでございませうがね、むかう
でも無理をいや、此方でも難題を持ち込むわけで、ち
やんと相談が出来て居ました。其晩でしたっけか、
其あくる晩でしたっけか、資がのつそり、いはない
ことか、案の定切ない呼吸を吹いて玄關へ立ちま
したから、来たりといふので遮つて、もうお座敷へ
は通しませずに、

「不可ませんよ、お嬢様を見込んだつて駄目です

よ。」

これ／＼かういふわけだからつて、何うせ他に許嫁があるの、何のといつても、とても肯くわけのものがぢやないのですから、極めて置いた、あのお亡くなり遊ばした旦那様一件を、私が、取次いで、此口で、きつぱりと言つてやりました。

「左様か。」

左様かもないもんだ、あなた、横柄ぢやありませんか。

「左様か、其に違ひないですか。ぢやあ其清子様のお亡くなつた父様が承知をすれば可いのですか。きつともう一度きいてくれ。つていふでせう。馬鹿は馬鹿だけに馬鹿念を推すこつた。何の思ひ違ひをして「左様か」なんといふのだらう。あとで考へて！いまに泣き出すだらうと、さう思ひましてね一度またお奥へ參つて、うかゞつてから、またお玄關へ出ましてね、

「はい、違ひません、其通」と大きな聲でいつ

てやりました。

「いや、其なれば追つてうかゞひます、宜しく。」
つて、あなた、元氣よく歸りましたわ。えゝ！
馬鹿め、晦日の晩に金子を拾つたら奢るといはれて、
眞に受けるも同じだと、皆とさういつて、まあ／＼
厄拂だ、あゝいつておきやもう來つこなし、すつき
りしたと、さういつてをりますと、まあ何うでござ
います！」

初は眼の玉をくる／＼さして、

「驚いたぢやあゝりませんか。あなた此うらは墓
所でございますが、炎天にすわり込んで身動きもし
ないで、何うでございます、」墓から返事を聞く
のだ。「とさ、ういつて、テコでも動くやうな様
子がございませぬ。とのツけにお欽さんが見て來た
といつて其話をしました時は、誰も眞實だと思つた
ものはございませぬので、」といひかけて眉根を
寄せた。

「誰も眞實にやあしませんのに、お嬢様は其をお聞き遊ばすなり、

「あゝ、弱つた！ 私や殺される」 つて蒼くおなり遊ばすんでございませう。

一體、お父様には七つの時とやらにお分れなすつたんださうでございしますが、其時分、此お寺はそりや立派なものだつたつて、いひますが、お墓參のついでに、何か、此裏でお嬢様が摘草をなすつたことがございますさうです。董だ、土筆だ、連翹だ、嫁菜だわと、ツイ、うかれて、薄暗くなるまで遊んで在らつしやつたつていひますが、お内へお歸りなすつてお休みなすつた其晩、大變うなされて、何でも氣絶ておしまひ遊ばしたつていひます。

「あゝ、恐い夢を見た。何でも廣い／＼眞中の凹んだ野原に彼處此處水田がある、むかうに小高い丘があつて、其崖とも思ふ處に、櫻が七所咲いて居た、一本々々夕日がさして、そこいら暗くなつて寒くな

つた、遠くに、眞黒な門構の空までとゞくやうなのが
見えた處で、何とも分らないが、恐い／＼／＼めに
あつた夢で、何處だか知らないけれど、何うして
も、昨日摘草をした父上様のお墓の裏田圃のやうだ」
つておつしやつて、

「何んな恐いことかそりやもう忘れてしまつたけ
れど、櫻が七處と野原の門とは、今でも眼の前に見
えるやうで、思ひ出しても氣が遠くなるやうで引入
れられるやうな、いやあな／＼氣持がする。そして
何といふことはないけれど、二度とまた其處へゆく
と、生命がなくなるやうな氣がしてならない。もう
／＼彼處へはゆきません。」

つてね、奥様は、そんな櫻なんぞ、彼處にはな
いとおつしやるけれど、お嬢様は五年經ち、七年經
ち、今でも其恐さが忘れられないんでございますつ
て。秋の暮合なんぞ、一人で茫乎庭でも眺めて在ら
つしやると、何か影燈籠のやうに其時の景色が見え
ますさうでね、さうするたび寒氣がするつて、うつ
とりして氣脱がしたやうにおんななさいますが、ま

るで持病のやうにおなり遊ばして在らつしやいますから、此間（このあひだ）なんざ、夜中（よなか）にあなた、車（くるま）で茗荷谷（めいがだに）の化（ばけえ）榎（のき）をお歸（かへ）りなさる時（とき）、幌（ほろ）を通してまつくらやみの往（わう）來中（らいなか）へ、あかるく其櫻（そのびくち）が七所（ななところ）の景色（けしき）が見（み）えたつて、變（へん）な風（ふう）でお歸（かへ）りになりましたわ。

そんなでございますから、奥様（おくさま）もしまひにや薄氣（うすき）味（み）が悪（わる）くなつたつて、ツヒぞ此（この）お墓（はか）へは參詣（さんけい）をなさらないものですから、お寺（てら）がこんなになつてもお墓（はか）は其（その）まゝで、他（ほか）へお位牌（ゐはい）だけ置（お）いて、其（その）處（こ）でお祀（まつり）をして、ほんとにお骨（こつ）の入（はい）つた此方（こつち）は全然（まるで）の野田圃（たんどぼ）にしつばなしで、其（それ）こそお嬢様（ぢやうさま）なんざ口（くち）へ出（だ）しても此邊（このへん）のことをおつしやらない位（ゐ）、何か（なに）此裏（このうら）には因縁（いんねん）づくお嬢様（ぢやうさま）を殺（ころ）さうとする大きな墓（がま）でも土（つち）の下（した）に居（ゐ）るやうなことになるのでございませう。あの、執（しふ）念（ねん）の恐（おそ）しいのが、斷食（だんじき）で此處（こゝ）へ坐（すわ）り込んで、動（うご）かないと、お聞（き）き遊（あそ）ばしちやあ、そりやお驚（おどろ）きなさるのも御無（ごむ）理（り）はないので。

ともかく、念（ねん）のためにといつて、一昨（を）日（と）私（わたし）が見（み）に參（まゐ）りますと、まったくぢやあございませんか。

飛とんで歸かへりましたが、お嬢ぢやうさま様にはお聞きかせ申まをして
可いいのか、悪わるいのか、分わかりませんから、内ない證しよでソツ
と奥おく様さまに申まをしますと、吃びつ驚くり！

何なにしろ秘かくして、といふので、お嬢ぢやうさま様には、何なんでこ
ざいます、お欽きんさんが串じやう戲たんでおどかしたんでござい
ます。左さ様さうでせうともと、奥おく様さまも相あひ槌うちで。」

「些少も御心配を遊ばさないやうに、もう氣もな
いことにしましたんですけれど、お嬢様は土氣色に
おなんなすつて、

「約束ごとでせう、」 とばかりで、しをれ切つ
ておしまひなすつたもんですから、氣になるなら安
心をするやうにと、御符やら、お守やら、何しろ少
しでも遠い處へ退くのが可からう。箱根へでも遁げ
ようか、それとも家を引越さうかと、奥様は大騒

お嬢様は却つておちついて、

「もう私は斷念めてをりますから。」 ツて、永
のおわかれだわ、お名残惜いわのと、情ないことを
おつしやつちやあ、さめ／＼とお泣き遊ばす。

これはもう何うなるんでございますか、寢たツ切
枕について在らつしやるといふでもございませんけ
れど、召食るものもろく／＼召あがらないといふ始
末でせう。

實は昨日も見に参りました、お嬢様にはともかくも内證ですが、奥様が氣を揉んで様子を／＼とおつしやるので、それでかうやつて今日もさつきから来て居りますが、一寸と昨日の處をずりもしないで、頬邊へ手をあて／＼つむいたつ切、草の中に坐つてますわね。

私も／＼、薄氣味が悪くなりました。初手から私のはあの人が大嫌で、いつでも氣の毒なほど不愛想にしましたから、もう、思が恐しい！

今日にも歸りましたらアノお邸はお暇でも頂かうかと思つてますもの。

びく／＼してかくれながらのぞいて居ました處へ、いきなりお出遊ばしたもんですから、何なにまあ吃驚したでございませう。何しろ大變なわけぢやあございませんか。ほんとに因業な奴ツたらない。」
と長物語の果は 憤 を帶て呟いた。

探了はさつきから、眼を半眼に開いたまゝ、片膝立てた上へ手をのせて、やゝ傾いて顔をのせて眠つ

たやうになつて黙り、一言も狭まないので、ぢつと靜に聞いて居たが、初が話し果てた時眼を開いて、

「やるな、先生。」
「といつて微笑した。」

「え！」

「いや、よく分かりました。女中、私はね、實は何です、其資さんのたつた一人の朋友ですが、かけ違つて久しく逢はないで居ました。今日村のものに話を聞いて、何か知らん逢つて見て、そんな捨鉢はやめさせようと思つて來ました。しかしさういふことでしたら、こりや皆道理だ。邪魔をしちやあ悪い、お前さんもお歸りなさい。私も此まゝで引取るですから、」

「ハヤ制帽を引寄せて、探了は歸らうとする。初は驚いた顔で眼を二つて、」

「ま、何でございますとえ、あなた。」

「お宅で何うにかなさるが宜しい、駕籠で迎に來てお引取なさるもよし、また其嬢さんといふのが來て介抱をなさるもよし、奥様といふのが、何とかわけをつけておわびをなさるも可からう。早く歸つて資吉が小兒の時からともだちの朋達で、大學に居ます、關堂寺探了といふ坊主がそういつたとおつしやい。仕方がない。」

といつて、迂り落つるやうに縁を離れて立上つたが、墓原の方を向いて首を低れた、大方永別を告げたのであらう。其まゝ蝙蝠傘をわきばさんで愁ふる顔で天を見た。何時の間にか下界を呑むやうな雲の峰がおつかぶさつて、地上に處々赤黒い影がさしてゐる、野末をおしまはすやうな雷の響！

「それでは、」といつたまゝ氣拔がしたやうな初を残して、關堂寺探了は低徊して門を出た。

山下屋の佐吉は、まだしやべつて居る。

「それから早稲田にも一軒ございます。矢來に三軒ございます。お家があるにやあゝりますけれど、手前主人どもの申しますには、今年ことしは金神こんじんは八方はつぱう塞がで、殊ことに芝しばの方角はうかくがいけませんさうで、何なんでも無理むりにお引越ひっこしになりますと、七人にんまで取殺とりころすつていふ恐こほいのでございます。尤もつともお宅たくには御家來衆ごけらいしゆうとお三人切さんにんきりでございりますが、人数ひとかずが足りませんければ兩隣りやうどなりへ行いつて崇たりまして、其それで足りませんと、親類しんるゐへ崇たるとまで申ましますので、西北にしきたの方はあき口ぐちにはなつては居をりますが、すべてお家いえのために今年ことしはお引移ひきうつりが宜よろしうございせんさうで、はじめつから申ま上げれば可よかつたのでございますけれどもツイ心付こころづきませんで。一昨日をとつひでございました。主人しゆじんにさう申ましますと吃驚びっくりいたしましたして、滅相めつさうな、直すぐお留め申ましたが可よからう、今いまお引越ひっこしといふ矢先やさき何なんな都合つがふがありませうとも知しれませぬのに、こんなことを申ましてお心持こころもちを悪わるうおさせ申ましましては濟すみませんが、知しつて申ましませんでは、たとひ左様さやうな事ことはございま

せんまでも、何だか心に濟みませんから、早速お話をしる、これがまた遠方へお越し遊ばして、手前でも大事なお花主をなくします、其が否さに捏造て申しますやうにお取り遊ばしてはなりませんから、そりやも長年お引立を蒙りました手前でもでございますから、これツきり御用を仰せつけ下さいませんでも宜しうございます。これまでに主人も申しますことでございますから、何卒一番お考へ遊ばして下さいますし。」と律儀は可いが、氣も知らないで、いふことだけすつかりいった。

さらぬだに窮迫懊惱のさなかへ、これを聞かされ、第一八方塞がよろしくなし、兎の干乾も妙でないので、心持を悪くすること一方でなかつた。

奥様は嫌な顔をして、

「いろ／＼お世話でした。」とばかり。

佐吉はあきたらない様子で、

「いかゞでございませう。お引越を其の御沙汰止。」

と皆まで聞かないで、奥様。

「分りましたよ。」

「それぢやあお留めになりませうか、」

「仕方がない！ そんなでは。」

「もう其が宜しうございます。たとひ忌はしいこととはございせんまでも、ひよつとお煩ひでも遊ばしてはなりませんから、はい、」

と獨合點でやう／＼腰をはづしたが、縁側を少し離れて、ゆつたりとお辭儀をして、

「今日は、――今日は御用は、」
「まあ可いよ。」

「また何うぞ、」 といつて丁寧ていねいに天窓あたまをさげて、へい／＼と、獨ひとりでいひながらそろ／＼と木戸きどを出でる。落着おちつき濟すましたもので、これでなくツては到底たうてい前垂まへだれで草履ざうりの爪つまさきを撫なでゝあるくことは出で來きない。

「氣きが利きかないぢやあないか、ほんとにしやうがない。」

と奥様おくさまはお人柄ひとがらにもなく、思おもはぬあくたいをいつて、其そのまゝ黙だまつて、うつむいて考かんがへてた。

清子きよこは唯沈たゞしづみ果はてた顔色かほいろで、風采ふうさい恰あたかも萎しほんだ夕顔ゆふがほといふ姿すがたで髪かみを結ゆつて居ゐる。

お欽きんは元結もとゆひを口くちにくはへて、清子きよこの鬢びんの毛けを握にぎつたまゝ、ソツと横よこを向むいて、うなだれ切きつた母親ははあやを見下みおろしながら人知ひとしれずニタリと笑わらつた。

「ちよいと出掛でかけて來こよう。お欽きんさん、お前まへ、私わたしが歸かへるまで一所いっしょに居ゐて、やつておくれ。」
と何なんにも知しらず、顔かほをあげた時ときいつた。

「母上、お出かけでございますか。」

「あゝ、ちよいとね、お前。」

と出さきを明かさないのも、實はさしあたり行く
あてがないからで、ぼんやりたつて行き、力なく餘
所行に着換へながら、傳通院へ易でも立てに行かう
か、毘沙門様へおみくじをおろしに行つて、ついで
に牛込の親類へでも寄つて見ようかなど、考へて居
るので。

「お欽さん、御迷惑であらうけれど。」

「いゝえ、私や構ひません。何うせかう暑くツち
やあ廻り切れませんからお邪魔をさしていたゞきま
せう。おゆつくりいつて行らつしやいましたな。」

「暑うござんすよ。母様、」

「暑いけれどね、」

母親は着換へて来てまた坐つて。

「ちよいと出かけようと思つてね、」

と何か煮え切らない様子で決しかねて居る。

「大した御用でもございませんなら、内に居て下さいまし。」

と清子はしを／＼としていった。

「さうさね。」

とまた考へる。行きたくもなかつたが、お欽の手前、立派に荷物まで着かへてからと、愚にもつかぬことを思つて見たり！ 元來がといふと、母親は資吉一件、何うして可いやら思案に餘つておち／＼とはして居られず、さうかといつて、ソレ水だといつて騒ぐわけでもなく、二三日といふものは内中しめ

り切つて灰吹の音ばかりして居るのだけれど、何だ
かまた沸きかへるやうな混雑が身體のよわりに打つ
かつて来て居るやうでもあつて、心からこの混雑の
中にぢつとして坐つて見て居るに忍びない！ 何で
も一時間なり二時間なり、乃至半日なり、戸外へ出
てぶらつとして歸つたら、其中にのゝるか、そゝるか、
生れるものは生れるだらうと、ほんの一時のがれの
考慮で、何處かへ出て行かうと思ふので。しかし出
て行つたあとで何事か持上るやうなことはあるまい
かと、留守のことも案じられるから立つたり居たり
で、餘所行の形を我身で持扱つて居たが、思ひ切つ
たか。

「あゝ／＼、さうだつた、ちよいと何だよ、直歸
る。」

と急に鳥が立つやうに出掛けるので、清子は結へ
た鬢の毛をぶらりと兩の肩へ垂れたまゝ、お欽と二
人で送つて出る。

玄關で、から白をまはすやうな遠雷が鳴つて

来て、母親は出かゝつて、また行淀んで居た、が既に晩しで、

「お早く、」

といふお欽の聲がゝゝつたから、其まゝで家を出て、おもての帳場から車に乗つた。

「およし遊ばせばいゝのにねえ。」

と清子は遣瀬なげに呟いて立つて居る。

お欽も格子戸をすかして空模様を見て、

「一雨来さうですよ。さあ、早く取上げてしまひませう。」

かゝる處へ、初は。バタノゝで、雑司ヶ谷裏の荒寺から引返した。いきを切つて勝手口に走り込んで、つかノゝ玄関へ廻つて出たが、

「唯今、奥、奥様は。」と忙しい。

「いまお出かけになつたよ。」

「へい、」と拍子ぬけがしたやうで、一體この物見といふのが、清子にはともかくも内密になつてゐるのだから、奥様お留守では打出しては言はれないので、近所へ使にいつて歸つたといふ分にして、後生大事に左の手に掴んで來た關堂寺探了の言は其まゝ懷中にしまつて、茫乎女中部屋へ引さがる。

「さあ、あなた。」

清子は勢なく舊の座に歸つた。お欽は再び鬢の毛を扱いて、一櫛ぐいといれる時、ごろ／＼とまた雷が鳴る。

まだ其時は日の光が全く雲に包まれないで、きら／＼輝いてた庭の樹立が一面灰汁をあびたやうになつて見えた。やがて髪を結上げて清子が合鏡をしながら明みへ向直つて、昵と見込んだ時、星の落ちたやうな光がした。座敷は薄ぼんやりして、お欽は白い手で、梳櫛を拭ひ／＼、顔を振向けて背状に清子を見返つたが、日蔭になつてる室の中の暗い方で鋭い眼でじろりと見て、

「あなた、お心持は何んなですか。」

と、ものありげに然ういつた。また一隈薄墨で刷いたやうに、空の色は黒くなつて、清子の顔の色は一際沈んだ。

「何ともいはれない嫌な氣持がするよ。」

「お天氣のせゐでせう。」

また■と太陽がさして、庭の柿の葉がすいて見え
るやうに蒼くなつて、座敷の口から縁側へ煙をあび
せたやうになる。森として風も吹かない。蝉の聲が
次第低になつて、はつたり止んだと思ふと、突込
んだやうに雷が鳴つて、末ひろがりにごろ／＼と段々
聞えなくなつた、が装返してまた鳴つた。

「降つて來ますよ。」

「さう、」

清子は手を束ねて氣づかはしさうに空を見たまゝ
身動きもしない。お欽は油を拭つた櫛で、二ツ三ツ
自分の髪に齒を入れたが、引懸つたのですかして見
ると、毛が少し絡つて居た。中指のさきでくる／＼
と巻いて取つて、わがねたのを抓んでつか／＼と縁
側へ出てはじいて棄てる。ぽつりと雨が落ちて來た。

「あれ、光りました。」

「は、」といひながら清子の眉が曇つたやうだ。

忽ち雨の脚が繁くなつて、風もないのに横亂れに颯々と間を置いちやあ、鏝を落すやうに降つて來たが、石燈籠の笠にニがかゝる、また光物が空を飛ぶ。

「鳴るね、」と獨言のやうにいつて、お欽は縁側に立つたまゝ、森の後にむら／＼とある、雲の形を見詰めて居る。

「あれ、ひどくなつて來るよ。」

「ちよいとは留みますまい、あの雲を御覽なさいな。」

とお欽は身を開いて縁の柱に手をかけた。同時に一枚まいてあつた青簾がぱつたり落ちる。雨はバラ／＼と降込んで板縁のあつちこちがぽつ／＼濡れ出した。ごー　轟ー　轟ー　と刻むやうに鳴る。

「縁側の戸をしめさせようね、」

「涼しうございますよ、」

「それでも段々鳴るやうだから。」

「大したことはございませんまいよ。」

「何だかこの近い處ばかりで鳴るやうだわねえ。」

「今度は後の方へまはつた様ですわ。」

「はやく遠くなれば可いんだけど、」

いつてる内に一しきり天地を沈めて瀧の音のやうな降になつて來た。簾越の庭前は暗くなつて、
の水が洋々として植込は浮いてるやうである。
窪

「もうこれぢやあ留むでせう。」

とお欽は些少すさつたが、吹込んで來るにもかまはないで、端近に立つてゝいつた。

「あゝ、さう、もう鳴りはしないやうだよ。」

清子もちつと活々して、恐々縁へ出て肩をならべ
る。其時は小降になつて居た。

「まだ光るのねえ。」と清子はきづかはしさう
に言つて、すかして見る。

四十四

「稲妻ですわ、此節は毎晩でございますの、ありや鳴るのぢやありません。」

と裏の藏の屋根の背後になつて、大幅な青い光が布のやうに伸縮をして居たが、しばらくすると提灯を仰向けたかと思はるゝ、凄じいあかりがして、其光がしばらくの間彼の洋々とした庭一面の水溜へ沈みも果てないで浮いたと思ふと、二人は呼吸をためて顔を見ながら、われ知らず一足あとへひいた。トタンに、

「あれ！ あれ、」と魂消つて、勝手の方から鼠が狩出されたやうに突入し來つて、

「お嬢様、お欽さん。」間の内を呼びながらぐる／＼まはつて、簀戸をついて、躍り込んで、三人の傍へひつたり寄つて、

「おほ、大變だ。」と顔色をかへる。

「ほんとに私も吃驚したよ、何しろ雨戸をお繰りなさい、」

「恐うございますもの、」と初は動きかねて逡巡する。此時はまた凄じい雨になつて、雷の音がしつきりなく西から東へ、東から南へ轟き渡つて絶間はなかつた。お欽一人立働き、

「そんなこと言つてたつてしやうがないぢやあないか。さあ手傳ふからお前さん手取早く繰出しておしまひよ。」

と叱るやうに極めつけられて、不承々々。とかうして雨戸はすっかり繰つたが、何うして電が見えないで済むものか。

「あれ、また、」

「大丈夫ですよ。」

といひも果てぬに、清子はワット絶叫して、お欽

の膝へ俯伏になつた。どんと響いて再びわら／＼と鳴りはためく。初は耳をおさへて踞まつたまゝ、石のやうになつちまつた。

「さあ、もう可うございます、もうそんなに大きいのか鳴り續くつてことはありません。」

とお欽に慰められて、清子は血の失せた蒼白い顔をあげて、ソツと背後の縁の方を見返つて、ためいきをつきも終らないのに、洋燈の火が薄くなつて、室の内が蒼白くなつたまゝ毛一筋動かないでひっそりした。

「何うしよう／＼、ね、あゝれ、」と身を竦め、肩を震はしたが、お欽の胸へ抱ついて、ぞつとした波を打つやうな背へ手をかけると、暖かい肌を透して汗びツしより。凡そ此位なのかと思はれる物凄いのが四ツばかり立つげに鳴つたから、お欽も眼をみて天井を仰いで、少し顔色をかへたが、うつむいて人心地もないやうな清子の小さくなつてる姿を見て、冷かな笑を含んだ。爾時清子の背へまはした

手に煙管きせるを持つたまゝで抱だいて居ゐたが、もいだように八やつと落おして、兩手りやうてをかけて搖動ゆすぶつて、

「お嬢様おぢやうさま、みんな思おもひですよ。男おとこの思おもひなんですわ。

ねえ！ お嬢様おぢやうさま、資吉すけきちはあなた、今頃いまごろ死しんだかも知しれませんが。此間このあひだ私わたしにさういひましたが、あの、

「することさへ構かまはなければ何どんな事ことだつて、思おもひの遂とげられないと言いふことはないものだつて、資吉すけきちはいひましたよ。」

お欽きんはかういつた時とき、いつもケンのある眼めの中にいふいへからざる凄冷せいれいの氣きを宿やどして居ゐた。

がツノと震動しんどうする。此時このときのは疊たゞへ突込つっこんだやうな響おびだつた。

「後生ごしやうだから、あの、後生ごしやうだから、衣服きものを出だしておくれ。後生ごしやうだから。」と聲こゑも絶々たえ／＼である。

「え！ 衣服おめしを、」

「私わたしがお嫁よめにゆく時ときの、お嫁よめにゆく時ときの、」

とうはごとのやうにいふ。

四十五

「初^{はつ}どん、おい、これ初^{はつ}どん、」
始終^{しじう}傍^{そば}について居^ゐる女中^{ぢゆうぢゆう}だから、こんな時^{とき}に衣服^{きもの}
を出^だせといふ其^{その}意味^{いみ}は初^{はつ}に分^{わか}るであらうと、さう思^{おも}
つて、お欽^{きん}はわからないながら清子^{きよこ}の言^{ことば}をつたへた
ので、

「初^{はつ}どんたらさ。」

初^{はつ}は其^{その}處^こどころでない。

「ねえ、出^だしておくれ、後生^{ごしやう}だから、」と清子^{きよこ}
はせき込^こんだやうで身^みをあせるから、耳^{みみ}朶^{たぶ}へ口^{くち}をつ
けて、

「何^ど、うなすつたの、何^どうなすつたの。」

「左^{ひだり}の箆^{たんす}笥^すの二^{ふた}つめの引^ひ出^{だし}にあるから、頼^{たの}むから
さ。」

「何^どう遊^{あそ}ばしたんでございますよ、」

「あれ、酷^{ひど}い、酷^{ひど}いねえ、酷^{ひど}いねえ、」と打^{うち}も

だえる。

「ですからさ、」

「早くさ、早くさ！」

清子はお欽に縋つて居た手を放したが、ちやんとすわり直さうとする耳許へまたはたゝがみで、裾を亂して横に倒れた。

「もう、私殺されるよ。死、死ぬんだから、あ、あこんな風をしちやあ、恥かしいもの、お晴を衣て、お嫁にゆく時の、出しておくれ、早くつたらねえ、」
といった時は、袖もまくれて、よれ／＼になつて雪のやうな二の腕もあらはである。清子はうつとりして居るらしい、大方室の中は櫻七處の景色になつて見えるのであらう。かういふ時だ。

お欽は後の壁におつゝけてある箆笥の二つ目の引出をあけて見た。上蔽の紙を取り退けると、いかにも一襲の晴着があるので、直さま引張出して持つて

來て、

「これですか。このお召なんですか。」

清子は頷くと、もに身を起して、やをら帯を解きかけるので、お欽は背後へまはつて、はらりと其晴着を開いた。ハツと得ならぬ薫がする。紹縮緬の長襦袢に紹の裾模様をかさねた水淺黄へ紅のすきとほる、丈の長いのが雪のやうな肩へかゝると、くるりと脛に絡うて褌を合した。お欽は下をもちながら、すり寄つて、

「何處へ、お嫁に入らつしやいます。資吉の處へですか。」

「私、私はこの車夫さんの許へ。」といった瞬間、あつとのけぞつて倒れかゝるのを、立膝でお欽は宙に支へて、横さまに受けて抱止めた。褌からはら／＼と紅の紹がこぼれて、清子は齒を食しばつて取亂したので、おや・・・といった切――
瞻ると眼を瞑つて、清子の唇の色は藍のやうである。

「お嬢様！ あれ、あれ、お嬢様、あなたお嬢様。」
と力を入れて呼びかけたが、他愛がない。

「お初どん、これさ、ちよいとだよ！ え、お初どん。」

「御免下さいまし、もう私は、」
と幽な聲。

「何をいつてるんだね。これ、おい、お嬢様が眼をまはしたといふのに、何だよ、そんなに好い女ぶつて尋常がつたつて仕様かないぢやあないか。え！ お嬢様が死にかゝつて居るんだよ。」

「え！」
さすがこれには驚いたり、初はやう／＼天窓を擡げる。

「水をもつておいで、水を早くさ。」

あたふた勝手許へかけ出した。

恐らく高島田にかけたら此位な腕はあるまいと自

分ぶんでも許ゆるして居ゐる、お欽きんの眼めにもまたかほどに癖くせの
ない素直すなほな結ゆひよい髪かみはあるまいと思おもつて居ゐる、清きよ
子こがさつき結ゆつた髪かみは、前まへ髪がみが弛ゆるんでうつくしい額ひたひ
に垂たれて、柳やなぎの眉まゆは鬢ひそめて居ゐるが絲いとのやうに眼めを瞑ねむ
つた、罪つみの無ない顔色かほつきと、紹ろの下したの乳ちのあたり衣紋えもんが
亂みだれて玉たまのやうなのを、お欽きんはぢつと瞻みまもつて、ケン
な顔かほの色いろも和やはらいだが、

「かはいさうに、な、」と、優やさしくひとりごと
をいつた。

四十六

「堪忍しておくれ、資さん、堪忍して下さい。」

私あ今になつてお前さんがこんなになつて、約束を變替るんぢやあないけれど、お前、私だつて何んなにか驚いたらう。

元はといつたら私が、お前、思つてる男に嫌はれて、彈られた、口惜いので、思ふことが叶はないといふお前の身になつて察したから、事こそ違へ、あゝ、氣の毒だ、可哀相だ。

何しろ、お姫様だか、御臺様だか、若様だか、殿様だか、車夫だか知らないけれど、眞個だわ、人がこれほどに思つてやるものを受けてくれないたあ何たら生意氣だらう。と自分の事からお前のさ、甲斐性のないのも腹が立つて、氣が揉めて、それにお前、思つてる對手が清川のだツてから、丁ど女敵だ。

其ためにや、私だつて思つた男に嫌はれたんだもの、ちやうど幸だ、お前を楯に取つて、さきは

知らないでも念晴ねんばらしをしてやらうと、資すけさん、私實わたしじつはさう思おもつたんでね。

蔭かげになり日向ひなたになつて、いろ／＼やつちやあ見みたけれど、到底とても出來できない相談さうだんだわ。何なんの、あんな弱蟲よわむし一疋いっぴき引擔ひつかついで來きて打縛ふんしばつて、帶おびを解といてお前まへの前まへへ轉ころがして遣やる分ぶんには、世話せわのやけるこつちやないけれど、お前まへそんなことはいやだといふから、むかうへも智慧ちゑをつけ、此方こつちへもおだてをかけて、何どうせお前まへはすてた身體からだで、ちつとでも願ねがひが届とどきや生命いのちはいらないといふのだから、後見こうけんで絲いとを引ひいて、とう／＼こんなことにしちまつたんだね、資すけさん。

お前まへの荒行あらいぎやうは利目きゝめがあつたわ、ちやうど此このかみなりが道具だうぐになつて、それに何なんだよ、お天道てんたう様さまにもからくりがあつたと見みえて、むかうでも利ききすぎる位くらゐ受うけてくれたわ。いまのさきも、とう／＼氣絶きせつしツちまつたぢやないか。

私わたしは何なに、半分はんぶんは狂言きやうげんだから身體からだに觸さはらないくらゐ芝居しばゐをすりや、可いいだらうと思おもつたけれど、お前まへは

正直しやうじき 一國いつこくで、ほんとに水みづ一滴いつてきのまないから、やつぱりこんな利きいたのかと思おもつたら、まつたくだ、私わたしも些ちつと少こは恐こはかつたわ。ほんとに念ねんといふものは恐おそしい、嬢ぢやうさんは死しにさうだよ。

そして、氣きが變へんにもなつた様やうだわ、うつゝに嫁入よめいりをする衣服きものを出だしてくれつて、紹ろの裾模すそもやう様やうなんか着き込んだわ、ね、可いいかい。

やう／＼水みづを吹ふいて、呼活よびいけて、それからわけを聞きいて見みたら、資すけさん、私わたしがあやまるのは此處こゝの事ことだ。
「

お欽きんはほつと一呼ひと吸いきした、其時そのときものゝいひやうも刻きざむが如ごとく落着おちついて、

「お聞ききよ、嬢ぢやうさんのいふのにやあ、私わたしは何どうも母様おつかさんのお歸かへりまでも、よう待つてられないやうな氣きがするから、誰だれにもいふまいと思おもつただけれど、懺悔ざんげだ遺言ゆいごんだと思おもつて聞きいておくれ。そして折をりがあつたらばたつた一言ひとことでいゝ、こんなこと思おもつ

て居たものが、大塚に一人あつた、とさういつて傳へておくれ。」

ともう覺悟をした風でしみ／＼いつた其對手が資さん、車夫ぢやあないか、あの、お前も知つてるだらう、私の、何の、信之助なんだもの。

えゝ！ 物好きな車夫に、とさう思つた私が何うだえ。

この道は格別だ、それではと思つて疑はないで、疑はないで考へると、資さん、此處ですよ。

私あ弱つたわねえ。

ねえ、資さん、私あこんなやくざだから、そりや思ふことも打あけて、いきなり男にぶつかるわ、口説くわ抱くわで仕たいまゝ、一ツ膳のものも食べあつたが、それでさへ、ほんとに此方を思つてくれな
いといや、口惜くツてこんな恐しいことも出來ずぢやあないか。それだのにお嬢さんは、初心で懐子
だ、すき自由にやあ門端へも出られない、一言もの
もいはれないで、それで思ひ込んだ日も私と同一時
だとすりや、秤にかけて御覽なさい、こりやむかう

の方が重いんだね。あんな意氣地なしの坊ちゃんの方、ぐんづりした二歳児に何處に可い處があるんだか、私でさへ分らなきや、こりや品物とは譯がちがつて、たとひ清川のお嬢さんだつて、眞底惚れないたあ限らない。思つた念は同一で、さきあ可哀相に初心だもの、一倍何の位な心だらう。

先のうちや、わけもないのに唯資さん、お前を彼處の内うちで輕蔑けいべつして、何だ婦人の癖くせにいきすぎな、資さんだつて一人の男おとこだ、男おとこがそんなに思つてやるのに、小女こむすめの分際ぶんざいで輕蔑けいべつをするたあ、生意氣なまいきだと、さう思つて居ゐたけれど、他にそれといふ思込んだ男おとこがあるので見れば、無理むりか知らないが、ま、無理ではないのだ。

ともあれ死ぬのだと思つた時に、あかしていつた、可哀相かはいさうにとさう思つて見ると、いぢらしくつて井戸へ落おつこちた雀すずめの子ぢやあないけれど、一生いっせいの晴衣はれぎを着きて小さくなつて震ふるへて居ゐた、顔かほの色いろも何なんにもない、地獄ぢごくで出でつくはした人のやうな、あはれな淋さみしい姿すがたを見みちやあ、矢も楯たても堪たまらない。

で、御心配をなさいますな、すつかり私が存じて居ります。分つてますからあつちへ行つて資さんにさういつて、きつとあきらめさしてあげませう、と立派にいつて来たんだが、此方へ来てまたお前さんの姿を見りや、右のものを左へやるやうな、容易なことぢやあないのだつたわねえ、資さん。

堪忍しておくれ、後生だ、堪忍してあげておくれ。よう、嫌かい。そりや道理だよ。無理ぢやあない。無理ぢやあないがね、資さん。

今いつたやうなわけだから、私がお前のことを道理だと思つて、こんなことを仕出来したも、おなじ信之助さんから起つたことだ、お嬢さんのことも道理だと思はなきやなりません。

ねえ、資さん思切つてあげておくれ。嫌かい、
といつて、ほろりと涙を落した。

「あゝ、嫌だ、嫌だ、嫌だらう。ねえ、承知は出
来ないだらうねえ。けれどもお前、折角十八にもな

つた、蚊かに一つさゝれないで、玉たまのやうなお嬢ぢやうさんだ、うつくしい嬢ぢやうさんだ、お前まへの思おもひに殺ころさしちやあ可あつたら惜あつたらものだ。可かはいさう哀あつたら相あつたらに、何なんにも知しらない、罪つみのない、こしらへたやうな女むすめぢやあないか。

折角せつかくあれだけに育そだつたものを、お前まへそりや因業いんごふだよ、私わたしや約束やくそくを違たがへるんぢやあないけれど、堪たまらないから、これ後生ごしやうだ、拜まがむから、思切おもひきつてあげておくんない！ よ、よ。

えゝ！ 矢張やっぱりいやなんかねえ。何どうしたらいいだらう、私わたしや飛とんだことをしちまつたわ。

資すけさん資すけさん。私わたしがお前まへに逢あはなけりや、私わたしが綾あやをしなけりやこんなことまでにやならないのだつた、其それを思おもつて、よ、資すけさん、腹はらは立たたう、腹はらは立たたうけれども私わたしが居あなかつたものとあきらめて、堪忍かんにんしておくれ。ね、ね、其そのかはり私わたしだ、欽きんです、私わたしがお前まへさんの女房にようばうになつて、一生いっしやう、一生いっしやう懸命けんめいにいつまでも世話せわをして、不自由ふじゆうはさせないから、おもひ切きつてあげておくれ。後生ごしやうだよ後生ごしやうだから資すけさん。」
と得堪えたへぬ状さまで泣なきじやくりをして、震ふるへて、ひつ

たり顔かほに顔かほを持たせた時とき、荒寺あらでらの墓地ほちの草くさの中で、
天てんは蜘蛛くもの巣すをかけたやうに、樹きには簾すだれをかけたや
うに、しつきりない紫電しでんの影かげに、抱だきし占めて居あた先生せんせい
が、平和へいわな顔かほで、髯ひげの斑まだらな可愛かほいい口くちで莞爾にっこりして、静しづか
に頷うなづいて見みえたのは、そりやお欽きんの氣きのせみだつた。

【完】